日本西洋古典学会創立 50 周年　特別記念講演会

目　　次

岡　道男：特別記念講演会挨拶 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
逸身喜一郎：記念講演について ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
伊藤貞夫：マックス・ウェーバーと古典古代史研究　・・・・・・・・・・・・・・・ 3
柳沼重剛：学会設立前後のことども　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・19
藤澤令夫：西洋古典学と、哲学の再生―― 回顧と展望 ――　・・・・・・・・・29

特別記念講演会挨拶

日本西洋古典学会委員長　岡　道男

日本西洋古典学会は、今年第 50 回大会を開催することになりました。1950 年、第 1 回大会と同時に本学会が発足しましたので、このたび創設 50 周年を迎えることになります。今回の特別講演会はその記念行事の一環として、日本学術会議・西洋古典学研究連絡委員会との共催のもとに開催される運びになったものです。

本日お話をして頂く三人の先生方は、ここで改めて御紹介するまでもありませんが、伊藤貞夫先生は歴史学の分野において、柳沼重剛先生は文学・文芸学の分野において、藤澤令夫先生は哲学の分野において、それぞれわが国の西洋古典学を代表される方であります。

西洋古典学が近代的学問として成立したのは今からおよそ 200 年前のことですが、その起りは周知のように二千数百年前のギリシアに遡るものであり、もともとヨーロッパ固有の風土で生まれ育った学問でした。このヨーロッパ生まれの学問がわが国に根付き見事に成長するに至ったのは、ひとえに先達の並々ならぬ努力と労苦によるものですが、本学会創設から半世紀を閲した現在、大勢の本学会会員が海外においても研究成果の発表その他の形で盛んに活躍し、わが国の西洋古典学は欧米では一目も二目も置かれる存在となっています。

現代の世界はすべてが激しい勢いで変わっていくのにたいし、古典は決して変わらぬものを中に秘めています。西洋古典学はこの変わらぬものを文献その他の資料を通じて追求する学問ですが、私たちの拠って立つ地点はこの現代ですから、現代の世界において古典をいかにして生きたもの、活力あるものにするかが私たちの課題となります。しかし一方では、このヨーロッパ生まれの西洋古典学が、文化も風土も大きく異なるわが国においてどのようなものであるべきか、という問題が当然生じます。欧米では、文化・風土はいわばギリシア・ローマの延長ですから、古代と現代という視点、つまり過去・現在という時

間の視点から問題が提起されています。しかしわが国では、これに加えてさらに日本とヨーロッパという、もう一つの視点、つまり過去・現在という時の視点のみならず場の視点からもこの問題に取り組む必要に迫られています。過去を顧みることなしに進歩はあり得ないと申しますが、先人・先達がどのようにこの課題に取り組んできたか、そして、先人・先達の努力の成果を顧みるとき、今後普遍的であると同時にわが国独自の西洋古典学をいかに構築していくべきか――これはわが国において西洋古典学に携わる者にとって等しく切実な問題であると思います。このたび第50回大会という一つの節目を迎えるに当たり、３人の先生方の講演からはこの問題への取り組みのための貴重な手がかりを頂くことができるものと信じます。

記念講演について

日本学術会議・西洋古典学研究連絡委員会委員長　逸身喜一郎

日本西洋古典学会は1999年に設立50周年を迎えた。日本における西洋古典学の半世紀をことほぎ、あわせて越し方・行く末を考えるべく、日本学術会議・西洋古典学研究連絡委員会が中心となって講演会を企画した。講演会は、1999年５月21日（金）、古典学会との共催のもと、学会の50回大会第１日目の午後、東京大学（本郷）山上会館にて行われた。快く講演をおひきうけ下さった３人の先生方のお話を将来の記憶に留めるべく、ここに掲載する。

50年という年月は、何でも起こりうる長さである。古典世界から例をひくと、アイスキュロスの『オレステイア』の上演（前458年）の50年後に（408年）、ギリシア悲劇の崩壊を予想せしめるに足る作品、エウリーピデースの『オレステース』が上演されている。

あるいはかりにアクティウムの海戦（前31年）によってローマの秩序が再建されたとするならば、その50年前はスッラの独裁の真最中であった。ローマはいかようにもなりえた。

第50回西洋古典学会の出席者のうち、第100回記念大会に出席される方はごくわずかであろう。とはいえそもそも50年後に第100回大会が催されるかどうかは、会員ひとりひとりの営為にかかっている。私自身、先達・先輩のご努力を受け継いで、発展させていきたい。それとともに西洋古典学（その根底にあるのはギリシア語・ラテン語でしるされた書物を、謙虚に後の世代に託す作業である、そう私は考える）へのご支援を、広く社会にお願い申し上げる。

またこれを機会に、事務方として西洋古典学会の運営を50年にわたって支えて下さった京都大学の歴代の皆様と、学会誌『西洋古典学研究』を毎年刊行するのみならずギリシア・ローマの書物を数多く出版していただいた岩波書店に、あらためてお礼を申し上げたい。

マックス・ウェーバーと古典古代史研究

伊 藤 貞 夫

このたびの私の話は、「日本における西洋古典学の 50 年」という共通論題のもとに、歴史学の立場から、我国における古代ギリシア・ローマ史研究 50 年の歩みを振り返って何かを申すところに、その趣旨があるわけですから、当然「ウェーバーと日本における古典古代史研究」を含意する筈であります。したがって、本日、何故ウェーバーなのかについて、先ず弁明をいたす必要がありましょう。

我国の古典古代史研究の歴史は、原随園先生(1)さらには坂口昂先生(2)あたりにまで遡ると見てよいでしょうが(3)、今日私どもが携わっている古代史研究の直接の源は、昭和 10 年代から昭和 30 年代にかけて産み出された村川堅太郎先生の一連のお仕事にあると申して宜しいでしょう。ここ 50 年の日本の古典古代史研究は、先生のお仕事に端を発し、それを底流としながら、以後いくつもの流れがそこに合して水量を増し大きな流れを成しつつある河に譬えられます。今日では研究者の数も増え、一つ一つの仕事も微に入り細をうがって、河の姿を過不足なく捉え描くことは難しくなっています。それには多くの時間と労力を要しますし、そもそもそのような研究史を今回の企画は求めていないということですので(4)、ここでは今申したような河の源流地点で流れの様相と方向を規定するのに与って力のあった一つの事柄について述べることにいたします。

一

それは、マックス・ウェーバーが我国の古典古代史研究に及ぼした影響というようなことです。歴史学を含め現在の日本の社会科学諸分野の基礎が築かれたのは、第二次世界大戦中から戦後まもなくにかけてのことで、古典古代史も例外でないことは只今申した通りですけれども、この時期に多くの分野で見られたのがマックス・ウェーバーの業績への注目とその摂取という現象でした。

マックス・ウェーバーが 19 世紀末葉から 20 世紀 10 年代末にかけて経済学・法学・政治学・哲学・歴史学そして何よりも社会学の領域で巨大な業績を挙げたドイツの学者であること、日本の社会科学の歴史の上でカール・マルクスといわば対峙しつつ、もっとも広く且つ深い影響を与えて来た存在であることについては、改めて申す必要もないでしょう。我国において経済学を始めとする関係諸分野の論攷にウェーバーへの言及が見られるのは大正年間からのようですが(5)、現在の日本の社会科学諸分野の直接の基礎が形造られた先ほど申した時期におけるウェーバーへの関心と彼の業績の摂取は、各分野を主導する幾人かの方々、具体的に申せば、ヨーロッパ経済史の大塚久雄先生、日本政治思想史の丸山眞男先生、法社会学の川島武宜先生といった諸先達の学問形成を奥深いところで規定しているところに、それまでと異なる影響の深さを見ることができます。

歴史学の領域に目を移しますと、中世ドイツ経済史の上原専祿先生がウェーバーの古代史研究に着眼され(6)、増田四郎先生によるヨーロッパ中世都市研究さらに後に紹介する弓削達先生の古代ローマ史研究へと、この学統は受け継がれて行くのですが、上原先生に寧ろ先立つ形で、これも後にやや詳しく述べる予定のウェーバーの論文『古代農業事情』と『都市』を古典古代史の専門家として高く評価し、そこから自らの実証研究を支える基本的立場の樹立への示唆を汲み取ろうとしたのが村川堅太郎先生でした。

そのことを示すのが研究動向紹介「polis を繞る問題」(『社会経済史学』10-11,12、昭和 16 年)、書評論文「古典古代」(『歴史学研究』133、昭和 23 年)、一般読者向けの論攷「西洋の起源」(『世界』昭和 23 年 5 月号)の３篇であります。これらは何れも『村川堅太郎古代史論集Ⅲ』(岩波書店、昭和 62 年）に収められていますが、この論集の刊行に際して書き下された同じ巻の第I部第 8 章「ポリスを繞る問題――Hasebroek 以後の半世紀」も、ウェーバーに対する先生の変らぬ関心を明かすものと言えましょう。

これら諸篇を通じ一貫して高い評価を与えられ、先生の古代史学形成の礎として摂取されていることを窺わせるウェーバーの学問的成果とは、最盛期ギリシアにおける流通経済の発展度如何についてのすぐれて実証的な判断、中世ヨーロッパ都市との比較において提示される古代ギリシア・ローマ都市像、上記諸篇ではこの２点ほどはっきりと述べられていませんけれども、オリエントとギリシア・ローマを共に含む古代世界に想定される諸々の国家類型とそれらの間の発展段階的な序列とに関する叙述、さらに以上三つの成果に共通する比較史的な方法であります。この４点については後ほどウェーバーの論文自体に即して改めて述べることとし、ここではそれらが村川先生の古典古代史像形成にあたり触媒となり枠組となった事実を指摘するに止めたいと存じますが、それでは何故ウェーバーの仕事が戦中・戦後の時期、先生の場合を含めて私どもの先達にあたる方々の心を捉え、広く現代日本の社会科学を形造る上に深い影響を及ばし得たのでしょうか。

このような大きな問いに正面から答える用意も資格も私にはありませんが、一つ申し上げることができるのは、ウェーバーの業績には、受け取る側の読みに応じて、それぞれの問題領域における包括的な像と思考上の枠組とを指し示すに足るだけのスケールの大きさ、奥行きの深さがあること、しかも類稀れな博識と卓抜な着想とに基づく独自の知見の提示、透徹した方法論の展開によって、各分野におけるその時々の先端的な研究動向とじかに切り結び、学問的な業績を産み出す糧を豊富に具えていることです。

さらに付け加えれば、現実世界に対するウェーバーの求道者的とも言える関心と参与、彼の学問的業績のすべてがそのような切実な現実への関心に裏打ちされているという事実があります。その 56 年にわたる生涯は、妻マリアンネ・ウェーバーの手に成る敬愛の情に満ちた伝記によって仔細に辿ることができますが(7)、そこから浮かび上がるマックス・ウェーバー像とは、今申したような意味での実践家的な資質と志向とを具え、寧ろそのことによって研ぎ澄まされた眼で考察対象を分析し叙述することを得た歴史家、社会科学者としてのそれであります。

ウェーバーはウィルヘルム２世統治下ドイツの政治・経済・社会に正面から向き合う時論家であり、経済学・政治学の専門家でありました。しかし彼の偉とすべき点は、その域を遥かに越え、自身生を享け育まれた近代ヨーロッパとは何か、それはいつどのようにして成立し、どのような特質をもち、こののち如何なる未来を予期しうるだろうかとの問いを生涯にわたって抱きつづけたことです。そしてこの問いに自ら答えるべく、周く世に知られる論文『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の《精神》』（1905 年）を書き、さらに中国・インド・イスラエルを考察の対象とする宗教社会学三部作『世界宗教の経済倫理』を公にしたのでありました。これらの作品が大塚久雄・丸山眞男両先生の戦中・戦後のお仕事を支える柱の一つとして働いたことは、ここで改めて申す必要もないと思いますし、それらがこのような働きをなし得た所以についても、ウェーバーの業績の特性に即して、はなはだ切り詰めた申し様ながら、すでに触れたところでありますが、ただ今述べたこととの関連でもう一点考えられるのは、戦中・戦後の困難な時期、日本の政治と社会およびそれを支える人々の意識の在り方をその歴史的由来に遡って捉え、且つそれらが将来向かうべき方向を探ろうとする、社会的な意味における自己認識への欲求に両先生の学問的な営みが規定され、そのことがお二人とウェーバーとを結びつける絆となったのではないかということです。

大塚・丸山両先生と比較すると、村川先生の場合、実証史家としての性格が際立っている、そこに先生の真骨頂があった。それは誰しも認める事実です。しかし戦時において先生が大学人として厳しく自己を律し、学問的香気に満ちた講義を続けられたことを、当時受講生であった日本史の専門家の方々が証言しておられます(8)。かの時期、リベラリスト今井登志喜先生を敬慕しつつ惑うことなく身を処した村川先生の、変ることなき広い意味での政治的・社会的関心を考慮の外に置いて、先生の学問を語ることは、その真価を見誤ることになるのではないか。事実、歴史それも西洋古代史を研究する主体的意味を絶えず自らに問うておられた先生にあっては、生涯を通して古代のギリシア・ローマを世界史のなかにどう位置づけるかという問題意識が基調低音として鳴り響き、それが表に出た書き物も少なくありません。先ほど挙げた「古典古代」「西洋の起源」など、まさに然りですが、専門の論文からも今申した基調低音が途切れなく聞える。そこに先生のお仕事の魅力と学問に対する志の高さが認められる、と私は考えております。その根は疑いもなくウェーバーにあります。

そのことを端的に明かすのが、『村川堅太郎古代史論集Ⅱ』（岩波書店、昭和 62 年）に収められた書き下しの大作「市民と武器」です。先生は古典期以前のギリシアのポリスと共和政期のローマ国家とを基本的に同一類型の社会と捉え、その国家構成員である市民権保持者たちを「古典古代市民」と呼んで、その社会的特質を比較史的視野の下に究めようとします。そのための切り口として、武器の供給・携行・使用の問題をこの論文で取り上げるのです。注目すべきは、論文の序説で、武具自弁の原則こそギリシア・ローマ市民の自立性を保証し、この原則の欠けるところ、中国に至る東方の専制君主制下の臣民固有の隷属

的地位が生じた、とのウェーバー『都市』の一節を引き、ウェーバーにより提示されたこの命題が以後の議論の導きの糸となることを明示している点ですが、それとともに興味深いのは、古典古代における武器の問題を、近世以降の日本における民衆と武器との乖離という私どもに身近な歴史的事実との対比のもと、現代世界を揺さぶるテロリズム、近代西欧のデモクラシーにおける市民の抵抗権といった問題を念頭に置いて論ずる旨が語られていることです。論文第５節でも、アメリカ合衆国憲法、フランス啓蒙思想、18 世紀イギリスでの常備軍・民兵比較論争、さらには律令制下の古代日本の場合にまで、「余談」と断りながらの言及が見られます。論文としての完成度に問題を残しつつも、晩年最後の力を傾注して物されたこの大作は、先生の古代史研究が現在私どもが国の内外で置かれている政治的・社会的状況を歴史家としての眼で考察しようとする志向に支えられていること、そのような志向と具体的な考察のための視点にウェーバーの影が差し、この種の影響は先生の生涯を通して変ることがなかったことを物語っています。忘れ難い事柄と評すべきでしょう。

二

ここ半世紀ほどの我国における古典古代史研究の歴史の上で村川先生のお仕事が占める位置と、それに対するこれまで見て来たようなウェーバーの影響を併せ考えれば、本日この場でウェーバーについて幾ばくかお話する意味を汲み取っていただけるのではないかと思います。しかし事はそこに止まりません。ウェーバーの古代史研究は、私ども自身の古典古代史研究に対しても少なからぬ示唆を与え、今後も与え続けるものと私は考えております。そのことを、これよりしばらくウェーバーの仕事に即して申上げたいと存じます。

ウェーバーは古代ギリシア・ローマの世界を如何なるものとして捉え且つ描いたか、その研究史上の意味はどこにあるか、それを教えるのが先ほど挙げた『古代農業事情』『都市』の２篇です。『古代農業事情』は 1909 年刊行の『国家学辞典』第３版に大幅な改訂増補を経て収められた字引の１項目ですが、ウェーバー死後、妻マリアンネによって編まれた『社会経済史論集』の劈頭 288 頁を占める大論文で(9)、表題からは直ちに想像できない、実は古代オリエントに始まりローマ帝政期に至る、ヨーロッパ人にとっての古代世界全体の歴史を社会経済史の観点から分析し叙述したものです。その意味で弓削達・渡辺金一両先生による邦語訳の題名『古代社会経済史』（東洋経済新報社、昭和 34 年）が寧ろ書き物の内容を端的に表していると申せましょう。

後者すなわち『都市』の方は晩年に執筆され、死の翌年、1921 年にウェーバー自身編集の一翼を担い労作発表の場ともしていた雑誌『社会科学および社会政策雑誌』に掲載された、これも長大な論文で、のちにウェーバーが生前、編纂に当った叢書『社会経済学綱要』の１冊として自らも発刊の準備を進めていた未完の大著『経済と社会』の１章として収録されました。私が繙いたのは 1947 年発行の第３版ですが(10)、この論文にも、幸い 1956 年の改編第４版による世良晃志郎先生の邦語訳『都市の類型学』（創文社、昭和 39 年）があり

ます(11)。論文の内容を一言で申すと、遠くにアジアの都市のありようを望みつつ、ヨーロッパ中世の都市、それも南欧と北・西欧とでは型が違うというのですが、これら中世都市と古典古代都市双方の特質を、両者の比較を軸に探り出そうとするものです。以上二つの論文は、いずれもが他に類を見ない広い比較史的視野と、それぞれの分野において専門家が積み重ねて来た厖大な業績を咀嚼しながら、それらを基にウェーバー独自の歴史像を彫り深く刻んで行く論旨展開の冴えとで、一読私どもを捉えて離さない魅力を具えています。

ウェーバーの論文の他に容易に求め難い価値は、このような全篇を貫く卓抜な構想力と方法論的な確かさにのみあるのではありません。それが今日なお学問的生命をもつ所以の一つは、古典古代史を考える上に不可欠の研究課題を叙述のなかに数多く包摂し、それら諸問題に対する自説を提示しつつ、ギリシア・ローマ社会の本質に迫る道筋を指し示しているところにあります。その代表的な事例が、我国においても上原・村川両先生によって早くに注目され紹介された、いわゆる古代資本主義論争に対するウェーバーの寄与です。

この論争は、19 世紀末から 20 世紀初にかけてカール・ビュヒァーに代表される歴史学派の経済学者とエドゥアルト・マイヤーを筆頭とする古代史家の間で闘わされたもので、要はアテネを中心に発達を見た最盛期ギリシアの商業や手工業を、近世ヨーロッパのそれとの比較において、どのような質のものとして評価すべきかについての議論です。一言でいえば、歴史家が古代経済の発展度を高く評価するのに対し、経済学者は量質ともに近世ヨーロッパ経済との間に決定的な格差がある旨を強調します。ウェーバーはこの論争を『古代農業事情』の序説と本論の古典期ギリシアを扱う章とで取り上げ、例の理念型（イデアール・テュープス）を武器として、議論に用いる諸概念の明晰化を図るとともに、法廷弁論を始め関連史料を独自の観点から分析しながら、詳しく自説を展開します。ウェーバーの立場は、基本的にはビュヒァー的な見方に与しながら、他方マイヤーらの批判にも一理ありとする、歴史学派経済学の子としての眼と、古代史家たちの研究成果に対して開かれた歴史家としての態度とを併せ示すもので、その高い説得力は論争のこの段階までの総決算たるの意味をもつと評してよいでしょう。

もっとも、ウェーバーの議論で決着がついたのではなく、論争はその後もつづき、ローマをも含む古代経済史研究のこの上ないパン種となって、幾多の個別研究を産み現在に至ります。古代史家の間では、実証的な史料分析を踏まえ、古代経済の発展度を積極的に評価する見方が今もなお後を絶ちません(12)。古典古代社会の在り方の根幹にかかわるこの問題の、ほぼ１世紀に及ぶ研究史のなかで、しかしながらウェーバーの発言は、かけがえのない重みをもっています。モーゼス・Ｉ・フィンリーとその流れを汲む人々の場合はさて措き、一体に欧米の古代史家とウェーバーとの関係は寧ろ薄いのですけれども(13)、古代資本主義論争への彼の寄与については、これを認めざるを得ない、そのように見受けられます(14)。そこにはそれなりの理由があるので、私の見るところ、ウェーバーの古代史研究のなかで理論・実証双方にわたり最もすきなく築かれているのが、『古代農業事情』で展開された、この問題に対する彼の見解であるように思われるのです。

その際、議論の確かな展開を支える要素の一つに、古代史家には容易に求め難い経済事象に対する理論的な分析能力、加うるにそれを踏まえたウェーバー独自の理念型概念の駆使があることは言うまでもありませんが、具体的な歴史理解の上で見逃すことができないのは、商業とくに海上交易が当時の地中海世界でもった意味を重んじ、その発展度を積極的に評価することによって、ビュヒァーや後にウェーバーの影響のもと鋭角的なギリシア経済史像を刻んだ古代史家ヨハネス・ハーゼブレーク(15)には見られない、幅と奥行きを共に具えた問題解釈の可能性を示している点です。近代以前の社会を理解するうえで農業と土地制度の考察は必須であり、『古代農業事情』全篇がそれを前提として書き下されているのですけれども、他面ギリシア・ローマの歴史と文化が沿海都市を軸に発展したと見るウェーバーにとって、商業への関心は必然のことで、この論文の節目節目にそれを示す記述が散見されます。その場合、ウェーバーの議論で注目すべきは、古典古代の商業には近世ヨーロッパのそれに見られるような宗教的動機による職業倫理に支えられた、合理的で持続的な経営が欠けていた事実を指摘している点です。

古典古代経済に対するこのような比較史的視点が精密な史料解釈に支えられて更に深い示唆を私どもに与えるのは、古典期アテネにおける手工業経営の本質についてのウェーバーの考察で、これこそ古代資本主義論争への参与を通してウェーバーが古代史研究に対してなした揺るぎなき貢献と言えるでしょう。デモステネスの弁論第 27 番に見える、彼の父が営む２種類の手工業の場合を典型として、法廷弁論に数例姿を現す比較的多数の奴隷を使役する製作場を、近代の工場と類似のものとみなす古代史家に対し、ウェーバーはそれらがおよそ「工場」とは質を異にする所以をデモステネスの記事の見事な読みを基に説き明かしていきます。

その第一の要点は、この種の製作場では経営者の住居の一部を舞台に奴隷一人一人が一貫作業を行い、彼らの間に分業と協業の体制があった形跡が認められないこと、にありますが、議論はさらに経営者の姿勢と奴隷労働の特質へと発展します。強制労働を本質とする奴隷使役の効率上の限界、財産の一項目として奴隷がもつ経済的な危うさなど、奴隷制度をめぐる様々な指摘も『古代農業事情』の重要な貢献の一つに数えられますけれども、ここでむしろ注目したいのは、前者すなわち手工業経営者の仕事に対する態度についてのウェーバーの論議です。

そこで強調されるのは、比較的多数の奴隷を使役する富裕な手工業者の場合、監督奴隷に日常の業務を任せるとか個々の奴隷の作業上の自立性を重んずるとかして、いわば間接経営の形を採るのが通例であったということです。これも史料の上で確かめられる事柄で、強制労働につきものの奴隷たちの怠業を避け作業効率を上げる方策として採られたものとする説明ともども説得的なのですが、ウェーバーの議論はそこに止まらず、先ほど商業とのかかわりで触れたと同じ職業倫理の問題にまで及びます。

古典古代の流通経済を担った商人や手工業者には宗教的動機に支えられた職業倫理が欠けているという、『古代農業事情』の序説に見えるこのウェーバーの指摘は、申すまでもな

く『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の《精神》』での主張を梃子とするものですけれども、近代資本主義の歴史的な源を探るウェーバーの視線は、『古代農業事情』本論の末尾では近世初頭の宗教改革を越え、ヨーロッパ中世都市にまで遡ります。ローマ帝政期の社会を論ずるこの個所は、序説と並んでウェーバーの古代史研究の究極の目標がどこにあったかを示します。要は、近代資本主義の形成にあたり不可欠の社会的要素であったヨーロッパ中世都市と、古典古代社会の核をなすギリシア・ローマの都市とでは、その質において大きな隔たりがある。片や古典古代、片やヨーロッパの中世および近代との間には、したがって社会経済史的観点からすれば、明らかな断絶が認められる。近代ヨーロッパの申し子であるウェーバーにとって、古代史研究は、とどのつまり比較という手段を用いた歴史的な自己認識の道であったのです。

三

それでは、ウェーバーは古典古代都市とヨーロッパ中世都市とをどのように対比するのでしょうか。『古代農業事情』の末尾にその見取り図は概略示されているのですが、議論の十分な意味での展開は、もう一つの力作『都市』で果たされます。ウェーバーの作品史に即して言えば、二つの論文の間に『世界宗教の経済倫理』三部作が書かれ、それによりウェーバーは世界史家としての相貌を現わします。その比類なき視界の広さを示すのが『都市』冒頭の二つの章です。そこではひとまず古典古代都市とヨーロッパ中世都市とが西洋都市として括られ、インド・中国・日本などのアジアの都市と対比されます。その上で、ウェーバーは近代以前の西洋都市の特質を次のように規定します。近代以前のアジアの都市が氏族制やカースト制の呪縛の下に統一的な市民共同体を形成し得ず、また専制的な支配者により武装能力を奪われて官僚制的な統治を甘受せざるを得なかったのに反し、西洋の都市は武具自弁の原則を維持し、中世都市の場合でも封建制のもと国王・諸侯の間における権力の分散に助けられて、対外的な自立を果たし、統一的な市民共同体を形成し得た、というのです。

そこから議論は西洋の都市に収斂し、共に貴族支配から平民による政権掌握へと歴史的に推移する古典古代都市とヨーロッパ中世都市とについて多角的な分析と叙述が、両者を比較しながら展開されます。そこでの論議を導く最も太い糸が、先ほど紹介した論文「市民と武器」で村川先生も言及しているウェーバーのテーゼ、軍制が社会の在り方を規定するとの見方です。武具自弁の原則が貫徹されるところに団体構成員すなわち市民たちの軍事的・政治的自立があるという命題は、それぞれ独立の小国家として競合的分立の状態にあったギリシア諸ポリスの世界にこそ、最もよくあてはまるものです。なかでも重装歩兵戦術の確立による中堅農民層の軍事的貢献度の向上がポリス民主政を生み、且つそこにおいて市民共同体は「戦士ツンフト」として史上他に類を見ない完成とそれに伴う閉鎖的性格とを手にしたとするのがウェーバーの主張ですけれども、昭和30年代の後半以降、古典期アテネの土地制度や市民権政策を対象とする高度に実証的な研究が我国で企てられた際

(16)、このウェーバーの指摘は、あるいは村川先生のお仕事を回路としてと付言すべきかもしれませんが(17)、少なくとも考察の枠組を提供するものであったと申してよかろうと思います。

ローマの場合を含め、古典古代都市の本質が土地所有に基盤を置く戦士たちの共同体たるところにあるとすれば、都市生活の維持に必須の商業や手工業はいかなる人々によりどのような形で担われ、それらはまた市民たちの価値体系のなかでどのような位置を与えられたのでしょうか。ウェーバーの議論で古典古代都市とヨーロッパ中世都市との対比が鮮明となるのは、この問題とのかかわりにおいてです。中世といっても南欧でなく北・西欧の都市が古典古代都市ととりわけ対照的な位置に立つとウェーバーは見ます。そこでは商工業を本業として営む富裕な商人や手工業者が都市運営の主導権を握り、人々は古典古代都市におけるように氏族制的団体の一員としてでなく、個人としてギルドやツンフトに所属することを通じ市民共同体の成員となる。市民たちは平和裡に経済活動が続けられることを願い、都市は商工業の振興を政策の中心に据える。中世都市は経済人 homo economicus によって担われた「生産者都市」だとウェーバーは言うのです。

古典古代都市での事情は、およそ趣を異にします。市民は本来、戦士たる土地所有者と観念され、商業や手工業は彼らにとってふさわしくない仕事と考えられていました。古典期アテネの場合に即して言いますと、先に見たような父デモステネスなど富裕な市民による手工業経営、同じく彼ら上層市民による海上貸付といった商工業からの間接的な利益の取得は別として、自ら手の技に携わったり小商いを生業とするのは、外人や奴隷にこそふさわしく、市民たるもの、できればこれを避けるべきだというのが彼らの間での通念でした。土地所有者の階層から脱落し、都市部で得られる手の技や小商いからのわずかな収益の他は国家から給付される各種の手当や戦利品をあてにして生活する下層市民も、奴隷制手工業経営や海上貸付で富を得る上層市民も、共に生産者とは言えない。彼らは先ずもって政治と軍事に関心をもつ政治人 homo politicus であって、経済的には消費者だ、とウェーバーは捉えます。彼によれば、古典古代都市は本質的に「消費者都市」でありました。生産者でなく本来戦士たるべき消費者としての古典古代市民たち、彼らと近世初頭にその萌芽を認めうる産業資本主義との間には何のかかわりもない。その意味で、ヨーロッパ中世と違って古典古代は近代とはつながらない。ウェーバーの古代中世都市比較論の結論は、その辺りにあると言えるでしょう。

四

ウェーバーは、『古代農業事情』の序説に見える或る提言によって、我国の古典古代史研究にもう一つ大きな影響を与えています。その提言とは、古代国家の諸類型とそれらの間に想定される発展段階的序列をめぐるものです。それを『古代農業事情』の訳者の一人、弓削達先生が古典古代史の動向を巨視的に見定めるのに活用しておられる。そのことに、ここで触れておきたいと思います。

弓削先生のお仕事の中枢を成し、私などギリシア史を勉強している者から見ても魅力的なのは、古典古代を市民共同体国家たるポリスを歴史の担い手とする世界として括り、そのなかでローマが国内的には平民に対する貴族の根強い支配、対外的には広大な領域支配を、ギリシアと比べ格段に顕著な形で実現し維持し得た事実を、このポリスの共同体としての特殊性に帰して、その歴史的推移を追究する一連の論著の存在です。単行本に限っても『ローマ帝国の国家と社会』（岩波書店、昭和 39 年）に始まり『地中海世界とローマ帝国』（岩波書店、昭和 52 年）に至る 4 冊ほどの書物を挙げることができますが(18)、そこに一貫して認められるのは、ウェーバーの古代史理解への傾倒です。最後の『地中海世界とローマ帝国』になると、近年の内外における個別研究の著しい進展を受け、それらの旺盛な摂取の上に立って、ローマ帝国の成立から衰退までを、ウェーバーの説から示唆を受けながらも、どちらかと言えばそれを相対化し、時には批判を交えつつ叙述していくのですけれども、それ以前の著作では、ローマ社会史の大筋を辿る際にも、また後期ローマ帝国の性格把握や奴隷制の捉え方についても、ウェーバー説を基本に据えた議論の運びを見せます。

そのなかにあって、とりわけ言及と活用の頻度が高いのは、ウェーバーの想定する古代国家諸類型の発展序列のうち現実にはアテネのクレイステネスの改革とローマのホルテンシウスの法にその完成に近い姿を認めうるとされる「重装歩兵ポリス」ないしは「重装歩兵民主政」といった類型概念です。ウェーバーの提示するこの国家類型は、その前に位置する「貴族政ポリス」、後につづく「民主政市民ポリス」と組み合わされ、前古典期から古典期にかけてのギリシアならびに共和政期から帝政初期に及ぶローマの歴史を共に覆い、双方の歴史の道行きを的確に示します。弓削先生は、これら三つの類型概念とくに古典古代ポリス本来の在り方を理念型的に表す「重装歩兵ポリス」を用いて、ギリシアとの比較を念頭に古代ローマの歴史を彫深く描こうと試みます。

その場合、以上三つの類型を今申した時間的序列に従って包み込み、それゆえ発展の要素を具える「市民共同体」という遥かに幅の広い概念を弓削先生は編み出します。そしてこれを使って古代ローマ国家の成立・発展・衰退を理論的に説明しようとするのです。この試論に対しては、いずれも昭和 50 年代の前半に、二人のローマ史家により理論と実証の両面にわたり密度の高い検討と異議申立てが行われています(19)。その当否について専門を外れる私が意見を述べるのは差控えたいと思いますが、弓削先生の説へのお二人の批判は、それぞれ自身の確固とした古代ローマ史像、それも独創的でスケールの大きなローマ史に対する見方を前提としている点で、論争の域には達しなかったものの、我国における古典古代史研究 50 年の歴史の上で最も印象的な研究者間のやりとりを産んだと評して宜しいかと思います。弓削先生の市民共同体論は、それだけのインパクトを私どもの間に及ぼし得たということになりましょう。この力の源に、ウェーバーの古典古代史に対する巨視的把握が潜んでいる事実に注目したいのです。

ウェーバーによる巨視的な歴史把握は、しかしながら実は古典古代をも相対化する体のものでありました。すでに触れたように『古代農業事情』序説で展開されるそれは、オリ

エントとギリシア・ローマとをひっくるめた古代世界、そこに出現したと考えられる幾種類もの国家類型を、それらの間における時間的序列、「発展」の要素をも組み込んで、図式の形に編制表示したものです。原初的な農民共同組織から同じくプリミティヴな城砦王制へ、ここまでは共通なのですが、そこから先はオリエントの側が官僚制的都市王制、賦役・貢納制的専制王国さらにはペルシアに代表される世界帝国へと発展するのに対し、ギリシア・ローマの世界では、先に見た三つの類型のポリスが順次展開を遂げる。しかしここでもヘレニズム時代には君主政国家が優勢となって、最後にこのヘレニズム時代の貢納制的君主政を範としつつ、二つの世界を統合する形で古代国家の最終形態「ローマ世界帝国」が成立する。

以上の図式を理解していただくには、ウェーバーに代って幾つかの説明や留保を付さなくてはなりませんけれども、ともあれこれはユーラシア大陸西部における古代史全体の動向を視野に入れ、関連の史実とも概略整合的な、説得力に富む発展図式と申せましょう。弓削先生はこのうち古典古代ポリスの３類型に的を絞り、「市民共同体」論を構築されたのでしたが、実は村川堅太郎先生も、日本における古典古代史研究の意義を問うといった一般読者向けの文章を見ますと、このようなウェーバーの比較史的な古代史理解に示唆を受け、さらに大きな視野をもって古典古代史を考察しようと念じておられた様子がうかがわれます。

先に挙げた「西洋の起源」の他に、随想集『古典古代游記』（岩波書店、平成５年）第２部に収められている「古典古代史と日本古代史」などいくつかの文章を御覧下さるとよいのですが、それらから推して勝手に先生の考えを代弁すれば、次のようになりましょう。例えば、プトレマイオス朝エジプト王国は、中国の古代帝国や日本の律令制国家とその本質において近いのであって、ギリシア・ローマ本来のポリスの世界とは根本的に異なる。そしてこのオリエントから東、日本までをも含む東方の諸地域こそ、古代史の大勢を決する重みを有し、それに対し古典古代は寧ろ特殊な位置に立つ存在と見られる。中国や日本の古代に関し我々は欧米の学者よりも深い理解をもちうる故に、彼らとは違う視点から古代ギリシア・ローマを眺めることができる筈で、そこにこそ日本人が古典古代史を研究する独自の意義と役割を見出すことができるのではないか。

事実、先生は先ほどやや立ち入って紹介した晩年の論文「市民と武器」でその課題の一部を果たされ、さらに『アゴラ・フォーラム的人間』なる表題のもと、ポリス・友愛・弁論それに自然感情の四つの角度から、ギリシア・ローマ市民の世界史的特質を叙述する計画を進めておられました。平成３年 12 月、先生の逝去によって、著作自体は幻となりましたけれども、日本において古典古代史を学ぶ意義を問い質そうとするとき、立ち戻るべきは、村川先生が終生保ちつづけられた日本を基点とする比較史的な研究姿勢であろう、と私は信じております。そして、村川先生のこのような姿勢には、紛れもなくウェーバーの研究態度が投影されている。その事実にも思いを致すべきであると考えます。

五

晩年の講演『職業としての学問』でウェーバー自身が述べているように、文学や美術の作品と違って、学問的成果は後の世代に属する研究によって必ず乗り越えられるものです。ウェーバーの場合とて、例外ではありません。ましてやウェーバーは歴史の専門家ではありませんでした。これまで見て来た２篇の大論文も、同時代の古代史家、中世史家たちの厖大な個別研究を踏まえて成り立っております。１世紀近い歳月を閲した今日、その点からしても叙述の細部に異を唱えることは、さして難しくありません。一つ付け加えるならば、ウェーバーの生涯と業績に関する研究、ウェーバー学と言ってもよいでしょうが、その進展は我国の内外にわたって著しいものがあり、今日ではウェーバー自身望む筈のない事実も明らかになりつつあります。妻マリアンネによる伝記からは想像できない女性関係の秘事が露わになりましたし、写本の一字一句の解釈に夢中になれないようでは研究者たるの資格なしという『職業としての学問』で発せられた彼自身の名言の真意がどこにあるか首をかしげたくなるような、資料の恣意的な読み替えといった事実も公にされています(20)。いずれにせよ、あくまで史実に即して物事を考える歴史研究者にとって、ウェーバーを偶像視するいわれは全くありません。

冒頭に申した通り、現在では我国におけるギリシア・ローマ史研究者の数は、私が本古典学会とかかわりをもつようになった 30 年前には予想もできなかったような増加を見、個々の研究のありようも、問題設定の仕方に始まりパピルス写本や碑文のテクストに関する独自の読みの提示(21)に至るまで、時には欧米の研究と見分けがつかぬほど専門化され、議論も細かくなっています。経済史、法制史から政治史、新しい歴史学としての社会史への大方の関心の移動という事情も加わって、近年公にされる数々の論著にもはやウェーバーの影を認め得ないのも当然でありましょう。しかしながらウェーバーの論文『古代農業事情』と『都市』は、今なお熟読玩味に値する、と私は考えております。この２篇が、第一に日本において古代ギリシア・ローマの歴史をことさらに考察の対象とすることの意味について、そして第二にこのような自覚の下に立つ研究にとり必須と思われる考察手法について、いずれも示唆するところ大だからであります。

そもそもウェーバーがギリシア・ローマの社会と経済の本質を見究めようと思い立ち、厖大なエネルギーを注いで彫り深い像を刻むに至った根本の動機は、近代資本主義の歴史的個性の把握にありました。思想史的系譜では直系の子孫であり、社会の在り方からしても、アジアと対比するとき、古典古代との親近性を遥かに強く自他ともに認めうる近代ヨーロッパの子ウェーバーにとってすら、古典古代は自己認識のための比較考察の対象でありました。歴史研究の目標は一口で言い尽せず、多様であってよいのですけれども、私どもの置かれている歴史的位置を見定め、今後歩むべき道を探るところに、その最大の意義があることは疑いを容れません。ウェーバーに倣い、歴史研究の大道を辿る望みを、困難を承知で持ち続けたいものと、私は考えます。

このような大きな目標に照らし日本社会の特質をより確かな認識の下に置くには、その

歴史を世界史的視点から眺める多様な試みが、分野を越え、これまでにも増してなされる必要がありましょう。事実、東アジア史全体の動きのなかで古代から近世にかけての日本史上の諸問題を考える作業が日本史家、東洋史家双方の側からしばしばなされ、その成果には近年見るべきものがあるようです。ヨーロッパ史との関係では、近代革命史研究と明治維新史研究との相互影響、封建制をめぐる日本とヨーロッパとの比較研究といった古典的事例を挙げることができましょう。私ども古典古代史の立場からすれば、さしあたり日本古代史ないし初期中世史とのかかわりを問うべきでしょうが、この点については、かつて奴隷制を論ずる過程で日本史家が古典古代史に関心を示した他に、有効な研究上の試みを見出すことができません。しかし日本の社会をもっとも深いところで規定しているものは何かを探ることを目標の一つに据えている筈の日本古代史研究に側面から示唆を供し、またそのような役割を意識することによって、欧米の研究者とやや異なった角度からギリシア・ローマの歴史を考える。そして、そのことを通して私どもの古典古代史研究に独自の意義と成果をもたらす可能性を追求することはできないか。村川先生とウェーバーに学びつつ先ず想うのは、そのことであります。

私自身の関心に沿って二、三具体的な研究課題を挙げてみますと、家族、家的結合原理に立つ親族ないし氏族制的集団、アテネ型の奴隷とローマのクリエンテスに、対極的な二つ類型を見出す、もっとも広い意味での従属的社会関係などに関する考察がそれです。これらはいずれも古典古代史研究の上での大問題であり、19 世紀以来の長大な学説史を有するとともに、近年における歴史学界全体の新しい流れとも重なって、改めて論議の的となっています。三つの課題は、古典古代のみならず他のいかなる地域、いかなる時代の前近代社会の骨格を理解する際にも避けて通ることができない性質のものであり、どの分野にあっても不可欠の研究テーマである筈です。日本古代史の場合も例外ではありません。寧ろいずれの問題についても、高度の学問的蓄積を遂げていると評してよいでしょう。そこから何を学び取るか、これら諸問題に関する日本史研究にいささかなりとも示唆を供しうるとすれば、それは何かについて考慮を重ね、古典学の本道に沿いつつ自らの古代史研究を地道に推し進めるかたわら、両分野の間における相互影響醸成への途を探る。以上は一例にすぎませんが、このような方途を採ることで、我国における古典古代史研究のさらなる展開を促すことはできないか、と愚考いたしております。

ところで、 以上のような作業に必然的に伴う史実考察上の手段、それは比較史的方法とでも呼ぶべきものでしょう。その意義の大きさこそ、ウェーバーが私どもに与える歴史認識論上、第二の示唆であります。古典古代史研究の立場から見て、ウェーバーの手に成るこの方法最大の成果が論文『都市』であることは、先の紹介によってお分かりいただけるのではないかと思います。『古代農業事情』でも、古代史の内外を自在に駆ける比較史家ウェーバーの姿は見紛うべくもありません。この点を高く評価するのが、フランスのローマ史家ポール・ヴェーヌです。ヴェーヌは、1976 年『パンとサーカス』(22)という著作で新しい歴史学の旗手の一人として名を挙げた人ですが、この人にはそれに先立ち 1971 年に『歴

史をどう書くか』（大津真作訳、法政大学出版局、昭和 57 年）という饒舌に満ちた歴史学方法論に関する記述があります。

このなかでヴェーヌは、20 世紀が産んだ歴史叙述の模範としてウェーバーの仕事を賞揚し、トゥキュディデス、マルク・ブロックと並べてその名を挙げるのです。とりわけ『都市』を念頭に、ウェーバーの叙述には、伝統的な歴史のリアリズムと社会学の野心と比較史の壮大な広がりがある、とヴェーヌは言います。過去と現在を共に歴史の視野に収めるとともに、「フランス史」とか「17 世紀史」といった空間や時間による歴史領域の裁断を止める、そして政治史的な出来事のみを重んずる慣習から脱け出し、これまで歴史家が注視して来なかった通史の上では目立たぬ事柄に目を向ける。以上３点に新しい歴史叙述の方法上の手掛りを求めるヴェーヌにとって、ウェーバーは偉大な先達だったのでしよう。私はヴェーヌの歴史学方法論をそのまま良しとするものではありませんし、ウェーバーの『都市』を彼が評するように歴史叙述の模範であるとも思いません。しかしウェーバーが伝統的な歴史叙述のスタイルを越え、比較史的方法を駆使して専門家が容易に想い到らぬような問題提示を遂げているというヴェーヌの指摘には全く同感です。広大な視野と独自の分析に支えられた比較史的考察にこそ、歴史家ウェーバーの真骨頂と魅力があると言うべきです。

これまで見て来た村川・弓削両先生それにヴェーヌの例が教えるように、ウェーバーの作品には読み方により様々な発見と啓示を与える奥の深さ、多面性があるように思われます(23)。先ほど挙げた目下私の関心を惹いているギリシア社会史上の三つの課題についても、ウェーバーは無論、言及いたします。とくに『古代農業事情』において繰返し議論の対象としている。といっても、個々の論点に即して言えば、同時代の専門家の意見が透けて見えたり、史料の解釈に問題を感じたりするところないではありませんけれども、しかしウェーバーの場合、一つ一つの史実の解釈もさることながら、それら史実が歴史像構築の上でもつ意味や位置を嗅ぎ分ける彼の比較史家としての鋭い感覚にこそ学ぶべきなのでしょう。

平生は或いは個別のテーマをめぐる国内・国外の研究の輩出に驚嘆かつ困惑し、或いは史料の解釈に頭を悩ますというのが実情で、さほどウェーバーを意識することはないのですが、このたび日本における古典古代史研究 50 年の歴史を一定の視角から語る機会を与えられたとき、否も応もなく念頭に浮かんだのは、冒頭に申上げた通り村川先生のお仕事であり、その根ともいうべきウェーバーの業績でした。私に１冊の書物とか座右の書とか呼べるものはありませんけれども、それに近いのは、只今ではお蔭を蒙ること深い弓削・渡辺両先生、世良先生の名訳が世に出る以前から、40 数年の付き合いのある『古代農業事情』と『都市』かとも思う昨今でございます。

註

(1)　原随園『ギリシア史研究』第一・第二・第三、創元社、昭和 17-19 年。

(2)　坂口昂『世界に於ける希臘文明の潮流』岩波書店、大正 13 年（新版）。

(3)　明治期以降の我国における西洋古典学全体の歩みについては、S. Yaginuma, A Brief History of Classical Studies in Japan. Kleos 2, 1997, pp. 311-318 が日本西洋古典学会創設期までを簡叙し、末尾に最近に至る哲史文三分野の主要業績略表を掲げるほか、M. Kobayashi, La Cultura Classica Occidentale nelle Università Giapponesi. Annali della Facoltà di Lettere e Filosofia dell' Università degli Studi di Milano 52, 1999, pp. 161-169 も、同じく明治期から現代に至る日本の西洋古典学研究の趨勢を三期に分けて紹介する。

(4)　1970 年代以降の日本における古典古代史研究の近況については、松本宣郎「西洋古代史――総合と拡散の二〇年」『地中海学の二十年』地中海学会、平成 9 年、13-15 頁が、海外の動向をも視野に入れつつ、限られた紙幅のなかで目配りの利いた見取り図を提示している。

(5)　丸山眞男「戦前における日本のヴェーバー研究」大塚久雄編『マックス・ヴェーバー研究』東京大学出版会、昭和 40 年、151-172 頁。しかし佐野誠「ドイツの一歴史家の見た日本のヴェーバー研究――W. Schwentker : Max Weber in Japan について」『思想』900、平成 11 年、132-142 頁によれば、近年、日本のマックス・ウェーバー研究史を精査したシュヴェントカーは、関係文献の初出を明治末年にまで遡らせている由。

(6)　上原専祿「歴史的経済学派の古代経済史研究」（昭和 17 年成稿）『独逸近代歴史学研究』弘文堂、昭和 19 年、39-72 頁。

(7)　マリアンネ・ウェーバー（大久保和郎訳）『マックス・ウェーバー』Ⅰ・Ⅱ、みすず書房、昭和 38-40 年。

(8)　一例として、永原慶二「出あいの風景　村川堅太郎先生」『朝日新聞』平成４年７月 28 日夕刊。

(9)　M. Weber, Agrarverhältnisse im Altertum. Gesammelte Aufsätze zur Sozial- und Wirtschaftsgeschichte. Tübingen, 1924, S. 1-288.

(10)　M. Weber, Die Stadt. Wirtschaft und Gesellschaft. 3. Aufl. Tübingen, 1947, S. 514-601.

(11)　『経済と社会』の作品としての成立とテクスト校訂にまつわる甚だ複雑な歴史、それとかかわるこの書物の構成上の問題については、Ｆ・Ｈ・テンブルック（住谷一彦・山田正範訳）「『経済と社会』からの訣別」『マックス・ウェーバーの業績』未来社、平成９年、95-177 頁。『都市』を『経済と社会』のなかに収める意図がウェーバーにあったか否かについて疑義がある旨をテンブルックは示唆するが、しかしそのことと『都市』の論文としての意義との間に当面かかわりはない。

(12)　本文上掲の村川堅太郎「ポリスを繞る問題――Hasebroek 以後の半世紀」が詳細な学説史を供する。その後も、例えば古典期アテネにおける銀行の役割を積極的に評価しようとする E. E. Cohen, Athenian Economy and Society. A Banking Perspective. Princeton, 1992 や、ローマ経済の発展度を高く見積る新たな理論的モデルの提示をめざす N. Morley, Metropolis and Hinterland. The City of Rome and the Italian Economy 200 B. C. – A. D. 200.

Cambridge, 1996（『西洋古典学研究』47、1999 年所載の坂口明氏の書評による）などの問題作が刊行されている。

(13)　実証史家の立場からウェーバーの古代史研究の予見性と独創性を評価しつつ、その業績と古代史学界全体の動向との乖離を指摘するものとして、A. Heuss, Max Webers Bedeutung für die Geschichte des griechisch-römischen Altertums. Historische Zeitschrift 201, 1965, S. 529-556. この指摘は今日においても妥当しようが、注目すべきはフィンリーが早くからウェーバーの古代史研究を受け止め、その影響の下に自らの古典古代史像を築いた事実である。その作業は初期の実証的労作 M. I. Finley, Studies in Land and Credit in Ancient Athens, 500 – 200 B. C. The Horos-Inscriptions. New Brunswick, 1952 に始まり、近年の欧米におけるギリシア・ローマ史研究の成果を踏まえつつ独自の視角から古典古代社会の全体像描出を志向する do., The Ancient Economy. London, 1973 ; do., Politics in the Ancient World. Cambridge, 1983 の二作に結実するが、とくにウェーバーを論じたものとして、do., The Ancient City : From Fustel de Coulanges to Max Weber and Beyond. Economy and Society in Ancient Greece. London, 1981, pp. 3-23 ; do., Max Weber and the Greek City-State. Ancient History. Evidence and Models. London, 1985, pp. 88-103 がある。フィンリー自身の一連のブリリアントな業績は、時に「新正統派」の形成を云々されるほど欧米の一部古代史家の間に少なからぬ影響を与えているが、それは近代ヨーロッパとの対比において古典古代の全体像をどのように結ぶかとの根源的な問いを内包する。前註所掲のコーエン、モーリーの二作は、primitivism とも呼ばれるフィンリー的な見方に否定的な応答例と見られよう。最近、翻訳紹介された 0. Murray, Cities of Reason, 0. Murray-S. Price (ed.), The Greek City: From Homer to Alexander. Oxford, 1990, pp. 1-25（桜井万里子訳「理性の都市」『思想』901、平成 11 年、9-29 頁）も、 この潮流のなかでの苦闘の産物である。そこでも古代ギリシアにおける政治の合理性を強調する視角から、ウェーバーの所論が援用されている。

(14)　かつて実証史学の伝統を背負う古代史最良の研究入門書として声価の高かった H. Bengtson, Einführung in die alte Geschichte. 2. Aufl. München, 1953 が、巻末の精選された文献一覧に、古代経済史の重要文献の一つとして『古代農業事情』を収めるほか、関係文献を博く掲げつつ問題史的な叙述を遂げる近年の古代ギリシア史研究入門 I. Weiler, Griechische Geschichte. Einführung, Quellenkunde, Bibliographie. 2. Aufl. Darmstadt, 1988 も、古代資本主義論争に触れつつウェーバーの業績に論及する。フィンリーに近い立場を採る M. M. Austin & P. Vidal-Naquet, Economic and Social History of Ancient Greece. An Introduction. London, 1977 が、この論争とそこでのウェーバーの位置を重視し、 叙述の起点としているのは当然と言えよう。

(15)　J. Hasebroek, Staat und Handel im alten Griechenland. Tübingen, 1928.（原随園・市川文蔵訳『都市国家と経済』創元社、昭和 18 年）

(16)　岩田拓郎「古典期アッティカのデーモスとフラトリア――「ヘカトステー碑文」の検討を中心として」『史学雑誌』71-3、昭和 37 年、1-48 頁、馬場惠二「アッティカにおけ

る非市民の不動産所有」『史学雑誌』71-8、昭和 37 年、1-34 頁、伊藤貞夫「ポリス社会における財産承継の変容」『史学雑誌』76-12、昭和 42 年、1-43 頁（『古典期のポリス社会』岩波書店、昭和 56 年、第二部第三章）。

(17)　村川堅太郎「ギリシアの衰頽について」『世界の歴史 6　歴史の見方』毎日新聞社、昭和 29 年、61-118 頁（『村川堅太郎古代史論集I』岩波書店、昭和 61 年、第６章）の前註所掲３作への影響ならびに岩田・馬場両論文の海外における研究動向と対比しての先駆性については、伊藤正『ギリシア古代の土地事情』多賀出版、平成 11 年、iii-iv頁に記述がある。

(18)　本文所掲の２冊のほかに、弓削達『ローマ帝国論』山川出版社、昭和 41 年、同『地中海世界』講談社、昭和 48 年。論文として、同「地中海世界とローマ帝国」『史学雑誌』87-6、昭和 53 年、1-44 頁。

(19)　平田隆一「ローマ市民共同体をめぐる若干の問題――弓削氏の市民共同体論の検討」『西洋史研究』新輯７、昭和 53 年、155-168 頁、同「ローマ市民共同体論――Civitas 国家の特質とその歴史的展開」『東北大学教養部紀要』30、昭和 54 年、192-216 頁、吉村忠典「書評・弓削達著『地中海世界とローマ帝国』」『史学雑誌』88-2、昭和 54 年、89-98 頁。平田隆一氏の批判の一部に対する弓削達氏の反論については、前註所掲『史学雑誌』論文 11-12 頁。なお吉村忠典氏の書評は、弓削氏との間で交わされたいずれも長文の私信を前提とする由。同書評 89 頁。

(20)　国内における最新の研究として、椎名重明『プロテスタンティズムと資本主義――ウェーバー・テーゼの宗教史的批判』東京大学出版会、平成８年、羽入辰郎「マックス・ヴェーバーの「魔術」からの解放――『倫理』論文における “Beruf” 概念をめぐる資料操作について」『思想』885、平成 10 年、72-111 頁。

(21)　K. Baba, On Kerameikos Inv. 388 (SEG XXII, 79). A Note on the Formation of the Athenian Metic-status. The Annual of the British School of Archaeology at Athens 79, 1984, pp. 1-5 ; M. Sakurai, A New Reading in POxy XIII 1606 (Lysias, Against Hippotherses). Zeitschrift für Papylologie und Epigraphik 109, 1995, S. 177-180.

(22)　鎌田博夫訳『パンと競技場』法政大学出版局、平成 10 年。この書物については、早くに本村凌二「書評・Paul Veyne, Le Pain et le Cirque. Sociologie historique d’un plurarisme politique」『地中海学研究』５、昭和 57 年、125-133 頁の論評がある。

(23)　註(13)所掲のマリー論文の場合も、ここに加えてよいかもしれない。折衷の苦心に伴う行論の晦渋を免れていない、この論攷への評価は、紹介者桜井万里子氏の解説文へのそれとともに、当面、留保しておきたい。

〔付記〕小論は、標記講演会のために用意した草稿を、当日、持ち時間の制約から省略した部分を含め、ほぼ全面的に復元したものである。ただし註は、本文の表現上の手直しとともに、のちの加筆による。文献の挙示は、小論の性質上、最小限にとどめた。（1999 年７月 18 日）

学会設立前後のことども

柳 沼 重 剛

はじめにお断りしておきますが、古典学会が設立されて第１回の大会が京都大学で開かれたとき、私はすでに東京で高校の教師になっておりましたので、学会の設立にかかわってはおりません。その頃松平先生のお手伝いをして小まめに働いたのは松本仁助さんです。ですから、学会設立当初の有様について御紹介するには、私よりは松本さんの方がふさわしいと思います。また、筑摩書房の『田中美知太郎全集』の月報に、前後４回にわたって「『西洋古典学会』発足の頃」と題する座談会が載っておりますが、これは1985年、田中先生が亡くなる数か月前に行われた座談会で、たいへん貴重な、そしておもしろい記録ですので、機会があったらぜひご覧になるようにお薦めいたします。出席者は田中先生、松平先生、本学会の前委員長・藤澤さん、現委員長の岡さん、今申した松本さん、それから京大の西洋古典の最初の卒業生で、筑摩書房の元社長の井上達三さんの六人です。私はと申せば、それより前のこと――といいますのは、この学会の創立には、今はなくなった生活社という出版社が深くかかわっていたのですが、私はその社のアルバイト社員だったという因縁で、創立以前のことをほんの少し知っておりますので、そっちの方を申し上げることにしようと思います。ただ、知っているといっても、当時私は学部の学生ですし、生活社の社員としてもアルバイトで下働きですから、そんなにいろいろ知っているわけではない。今申しました座談会の席で松平先生が、「ひょっとしたら柳沼君が知ってるかもしれませんね」とか「頼みの綱は柳沼君ですね」などとおっしゃっているのは光栄の至りですが、申し訳ないことに至って頼りない記憶しかもっていない。そのうえ私は不精者で日記をつけておりません。ですから、下働きの学生としてうかがい知ることができた範囲で覚えていることを申し上げることにいたします。ご了承ください。

＊

さて、きわめて個人的なことからお話を始めさせていただきます。私は昭和20年に京都大学の文学部哲学科の宗教学宗教史専攻に入学し、ほとんどすぐに応召し、広島へ連れて行かれて原爆にあい、そこでしばらく大学を休んで、昭和22年に復学し、復学後しばらくしたころ、哲学は己の任にあらずと悟りましたが、転学科するのがめんどうで、宗教学科に在籍したまま、ギリシアの宗教――デルポイの神託――について卒論を書くことにして、指導教官の武内義範先生にそう申し上げたら、「じゃあ、ぼくのヘーゲルなんかもういいから、ちょうど田中美知太郎先生がおいでになったところだし、田中先生からギリシア語をお習いなさい」と言われました。昭和22年の９月のことです。そこで田中先生の週４時間コースに出て手ほどきをしていただき（といっても、田中先生の授業は９月からでしたから、先生は「今年は促成栽培だな」とおっしゃいました）、こうして古典の世界に近づいたのですが、決定的に古典の世界の住人となったについては、まことにひょんな出来事がきっかけになりました。

復員してから１年以上、私はすっかり体をこわして、自分では休学していたつもりだったのですが実はそうなってはいなくて、そこである日、文学部の掲示板に授業料滞納者として私の名が張り出されました。あわてた私は、ちょうどその時はじめて売り出された「百万円の宝くじ」を売るアルバイトをしました。もう年の暮れでしたが、当時の物価から見れば漫画的といってもいい巨額の賞金をつけた宝くじを、年末のボーナスの時期に合わせて売り出したわけです。角帽をかぶったアルバイト学生一人一人に、太秦の撮影所の「ニューフェイス」つまり新人の女優を一人ずつつけて屋台に立たせ、赤いたすきに白抜きで「百万円当る宝くじ」と書いたのをかけて、二人して声を張り上げて「百万円いかがですかア、百万円どうス」と呼ばわって売るというものでした。場所は寺町三条、または新京極蛸薬師の角でした。そんなところへある日、田中先生の奥様と、武内先生の奥様とが相次いで通りかかられて、お二人とも宝くじを買ってくださいましたが、後日伺ったところでは、お二人とも何も当たらなかったそうです。――その日の夕方下宿に帰ってみると、武内先生の奥様から、うどん玉に葱を添えてお見舞いが届いていました。すっかり感動して一夜をすごし、翌日大学に行くと、田中先生からお呼び出しがあって、「君は宝くじなんぞ売っているそうだが、そんなことをしないと生活が苦しいのか」とのご下問で、「苦しければ仕方がないが、何も宝くじなんか売らなくたっていいだろう、ほかに何かないのかな」との仰せでした。そしてそれから年が明けて間もなく、まだ冬休みで東京の家に帰っていた私に今度はお手紙で、「東京の生活社という本屋の京都支社で――君も知っている『ギリシア・ラテン叢書』というのを出している本屋です――編集で人を求めています。アルバイトでもいいというから君の話をしたら、ふだんは京都で仕事をして、君は家が東京だから、休み中は東京の本社で働いてくれればいいそうです。宝くじ売りなんかよりずっといいと思います。休み中に一度お茶の水のその本屋に行ってみてください」とのことで、私はまたまた感激してお受けしましたが、この時すでに生活社、具体的にはすぐあとで申します兵藤さんという方が、田中先生にアプローチをしていたということです。

こうして私は、 生活社の京都支社のアルバイト社員になって、これを卒業までつづけたのですが、これのおかげで私は、古典関係の多くの先生方を存じ上げることになったのです。ただし、京都支社といっても、社員は、これも京大の学生ながら、もう何年か生活社で働いていた兵藤正之助さんという方、この方は元古典が専攻だったそうですが、当時は仏教学の学生で、卒業は私より後ですが、年齢は私よりいくつか上の方です。その方がボスで、あとは私だけ、計２人で、ですから、田中先生は「編集」とおっしゃいましたが、実際には編集と営業と半々ぐらいで、よく兵藤さんと手分けして、京都や大阪の本屋さんに、新刊本を大風呂敷にくるんでかついで売りに回ったり集金に回ったりしました。ついでながらこの兵藤さんは、京大卒業後はロマン・ロランに入れあげて、長いこと「ロマン・ロラン友の会」というのを主催なさっていましたが、さらにのちには、関東学院大学で日本近代文学を教え、評論家としても活躍なさっていました。残念ながら一昨年なくなりました。もしご健在なら、当時のことで私が知らなかったこと、あるは私の記憶が怪しくな

っていることをいろいろお聞きできたのにと思います。

生活社の東京本社（当時この会社はお茶の水の文化学院の中にありました）では、そのころ社長の鐵村大二氏が急逝して、代わってお兄さんの眞一さんが社長になっておられましたが、このお兄さんは元たしか造船技師で、出版はおろか会社経営も素人の方でした。そこで、元からいた谷本さんという、温厚で頭の切れる方だがなかなか決断しない編集者に加えて、東大の国文科を出た若手の、勇ましく決断する佐々木さんという方を編集長に迎え、さらに、やはり若手で、東大の仏文を出た小島輝正さん（この方はのちに神戸大学の教授になられました）を加えるなど、当時の生活社程度の規模の出版社としてはかなり充実した編集陣を張って、出版の幅を広げ、同時に「ギリシア・ラテン古典叢書」も企画を一新してばりばり出そうという計画にとりかかっていました。この「ギリシア・ラテン古典叢書」というのは、戦時中から出はじめた叢書で、当時西洋古典といえばこの先生というわけで田中秀央先生を中心とし、それに戦中の日本で細々と、しかし営々孜々として古典に取り組んでいた先生方、例えば哲学では京都の長澤信壽先生、歴史では慶応大学の青木巌先生などが協力して、翻訳の労作をお出しになっていたものです。これは前社長の鐵村大二氏の発想によるもので、この方は、「日本の他の出版社に欠けている視点からの出版物」というねらいから、いろいろすぐれた企画をお出しになって、現に多くの良書を刊行しておいででしたが、「ギリシア・ラテン古典叢書」というのも、そういう社長の企画のひとつだったのです。しかし、本来の企画者である社長が急逝して、佐々木さんが編集全般の実権をほとんど独裁的に掌握しはじめたころ、その佐々木さんや兵藤さんからよく聞かされたのは、「ギリシア・ラテン古典叢書」は田中秀央さんが中心になっていたが、あれではだめだ。古くて堅苦しくって、読者が寄り付かなくて、日本に古典を普及することはできない。これからは東京では呉、高津、村川などという先生方、京都では田中美知太郎、高田、松平などという先生たち、この先生たちは学問も本物だし筆も立つ、こういう先生方に中心になってもらって推進するのだ、ということでした。

秀央先生はケーベル先生の弟子として英語学の市河三喜と同期だったという方ですが、その秀央先生がだめだというのは、一口で言えばあらゆる意味で固すぎるからです。ギリシア語をカタカナ表記するにも、母音の長短を区別するなどという生易しいものではなく、例えば Zeus はズデウスと書く、つまりまずギリシア語の Z は［zd］だから、Zeus とはすなわち Zdeus なりというわけで、さらに、ギリシア語で同一音節に属する音をカタカナに写す場合、その第１音を表すカナは普通の大きさで書くが、他の音は一段小さいカナで表す、例えば Zdeus は一音節語ですね、そこで最初の音［z］は普通の大きさでズと書くが、deus は一段小さい字で デウス と書くわけです。ですから Thūkȳdidēs とか Plūtarchos とかのカタカナ表記は惨澹たるものになります。松平先生は秀央先生のことを「ズデウス先生」と呼んでおいででした。有名なのは、手紙でもはがきでも、末尾には必ず Festina lente! とお書きになっていたことで、私は今でも、Festina lente を聞いたり見たりするたびに、アウグストゥスでもスエトニウスでもなく、まず秀央先生を思うほどです。（この「ゆっくり急

げ」という諺を、少しつついてみると意外なほどおもしろいということについては、『図書』2000年１月号の拙文を見ていただければありがたい)。かと思うと、市電や市バスの停留所が多すぎるから人はむやみと乗りたがるのだというわけで、市電・市バスの停留所を減らす運動をお始めになる。大体少々の所は歩くべきなのです。京大の助手時代に、私も運悪くバスで秀央先生と乗り合わせたことがあって、そんなとき先生は「君は今日どこへ行くんじゃ」とおっしゃるので、「京大です」とうっかりお答えしようものなら、「京大へ行くのにバスに乗る奴があるか。降りたまえ」と次の停留所で降ろされたものです。こんな風ですから、秀央さんはどんなにおもしろいものでもつまらなく訳すという評判があったのは事実です。岩波から落合太郎先生との共著で出ている『ギリシア・ラテン引用語辞典』では、どんな言葉でも直訳調の文語体で訳してあるというのもその一例でしょう。

それはともかく、生活社は西洋古典の出版に熱意を燃やしていたわけですが、ギリシアといえばせいぜいプラトンとアリストテレスの名前ぐらいしか一般には知られていなかった当時、あそこまで熱心にギリシア・ローマのものを出そうとしたのは、ほかにいろいろ理由はあるでしょうが、いちばん基本的には、われわれは戦中からギリシア・ローマを手がけてきたのだという誇りと、敗戦後しばらくの間日本中、とくにインテリ層の間にみなぎっていたあの自由の喜びと、これからは何でもやりたいことに本腰をいれてやることができるのだという期待、それにつき動かされてのことだったと思います。こうして私などにもできるだけ多くの先生方を訪問させ、それがひいては先生方の間に、学会を作ろうという機運を芽生えさせたのだと思います。私が兵藤さんからよく言われたのは、なるべくちょいちょい先生方のところへ伺って、先生方に気に入られて信頼されてよ、ということでした。

＊＊

卒論のこともあるので、田中先生の研究室やお宅にはのべつにお邪魔しましたが、松平先生のお宅にちょいちょい伺うようになったのも、実は学生としてではなく、この生活社の社員として、兵藤さんに連れられて上賀茂・大田神社のお宅をお訪ねしたことに始まりました。当時松平先生は文学部の教官の中で最年少で、ギリシア語週２時間コースを担当なさっていました。

松平先生のお宅に伺うと、よく芹沢茂さん（のちに天理大学で古典のほかにオリエントの文書にも多大の関心を示された方です）が、日当たりのいい縁側でお子様の相手をしていました。松平先生のいちばん上のお嬢ちゃんと２番目のお嬢ちゃんで、４つと２つと言って指を出されたのを覚えています。芹沢さんは作家芹沢光治良氏の弟さんで、松平先生の２番目のお弟子さんです。１番目は、はじめにもお名前をちょっと出しましたが、のちに筑摩書房の社長になった井上達三さんです。井上さんはそのころすでに、卒論をラテン語で書いたというのが評判になっていました。後日ご本人から伺ったところによりますと、井上さんが古典をやろうと決めたのは、高校生のころ夏休みにギッシングの『ヘンリ・ライクロフトの私記』を読んだら、その中で彼が、「たとえギリシア語で書かれた文章がクセノポンの

『アナバシス』しかないとしても、それを読むだけのためにでも、ギリシア語を学ぶに値する」と述べているので、それならギリシア語をやろうという気になったそうです。ついでながら、３番目のお弟子さんが中村善也さんです。

やがてお子様のお相手役は芹沢さんから私が引き継ぐことになって、私はいよいよ足しげく大田神社をお訪ねすることになりましたが、その時分私が先生から学んだことといえば、おもに雑談を通してで、とくに先生のユーモアというよりは英語で humour といった方が当たっていると私は思うのですが、そういうヒューマーあふれるおもしろいお話はいつ伺っても、いつまで伺っても、この上なく楽しいものでした。そういう雑談の中で、寝床の中で読む本として何がいいかというのが話題になって、松平先生のご推薦は Oxford Companion to Classical Literature でした。寝床用の本はおもしろくなければいけないが、おもしろいだけだといつまででも読めて眠れなくなる、適当におもしろく、かつ適当に疲れるものでないといけない、そういう本としてこの Companion は打ってつけだというわけです。残念ながらこの本は 10 年ほど前に新しい編者のもとに改訂され、版も大型になったので寝床には向かなくなりました。そして私の意見では、新版は旧版より親切になった点もありますが、「読める」点では旧版より劣ります。ついでだから申しますと、Oxford Classical Dictionary も最近第３版が出て面目を一新しましたね。以前の、どうにも中途半端で役に立たなかったのが、今度は専門家の利用にも耐える立派なものになりました。しかしその代わり、「読める」辞典ではなくなりました。

そのころ松平先生は、京都の大翠書院という本屋から『エペソス物語』の翻訳をお出しになりましたが（これはのちに筑摩書房の「世界文学大系」の『古代文学集』に収められました）、そこの編集部に瀬戸内晴美という女性がいました。もちろん今の瀬戸内寂聴さんです。彼女の友人の女性が２人私の下宿にいて、彼女がそこへよく来たので、私もちょいちょいその仲間に引き込まれたことがありますが、当時の彼女はたいへん勇ましくて、それに年もあちらの方が私よりも５つも６つも上で、私なんぞはとても太刀打ちできませんでした。そんなある日松平先生が、「大翠から、君の知っている瀬戸内というのが僕の家にくるんだって」とおっしゃるので、「手八丁とはいいませんが口八丁の編集者で手ごわいです」と申し上げました。数日後「いかがでしたか」と伺うと、「来たぜ、来たぜ。それにしても、ようしゃべる子やね」。

兵藤さんの指示で、田中先生や松平先生以外にも京都・大阪在住の何人もの先生方のお宅を回りました。ローマ法の田中周友先生、哲学の長澤信壽先生、ユークリッドの訳をお願いする予定で、旧制大阪高校の神田力先生――印象に残っているのは高田三郎先生で、生活社としてはディオゲネス・ラエルティオスの訳をお願いするつもりだったのですが、高田先生は長々とああだこうだ、ああでもないこうでもないと説明なさったあげくに、「いやだよ、ぼくは。今言ったように問題だらけなんだから、あれは。ぼくはやらないよ」と、ちろっと舌を出していたずらっぽく笑われました。翌日田中先生にそのお話をしますと（そんなこと言わずにやれよと、田中先生が高田先生に言ってくださるように期待してだったのです

が)、「高田君はまじめだからな。だけど高田君の言い分も分かりますね。高田君ぐらい勉強が進むと、あっちこっちに落とし穴や何かが見えてきて、だからこわくて億劫になるわけだ。ぼくだってあの『テアイテトス』の訳は若くて勇ましかったからできたんで、今だったらあんなものを訳す気にはならないだろうな。だから君も、もし何か、とくに大きいものを訳したいと思ったら、若いうちにやった方がいい。年をとるとだんだんできなくなるから」。そうおっしゃいました。

高津春繁先生にお目にかかったのは東京の本社でした。今は岩波文庫に入っているアリストパネスの『雲』の訳をお願いしたご縁です。京大を出て東京へ引き揚げた私が、東大の大学院に入れていただいたのも、そのご縁がきっかけでした。東大の研究室で高津先生が、「今日ちょうど神田先生が見えてるからあなたをご紹介しておこう」とおっしゃって、はじめて神田盾夫先生にお目にかかったのも忘れられない思い出になっています。ソファーに横になったまま、頭のてっぺんから出るような感じの声で、「ああ、そうオ、あなた古典なの。ぼくは古典は amateur だから、あなたのお役にたつかどうか」とおっしゃったのですが、この時アマチュアと日本語で言わず、アマターと英語で、アクセントもイギリス式に-teur の方につけておっしゃったのには度肝を抜かれました。よほど英国生活が長かったのかと思ったらそうではなくて、とにかく英国人の乳母に育てられたからということで、ますます驚きました。そして、松平先生がよく「神田天皇と呉法皇」などとおっしゃっていましたが、その意味が半分ぐらい分かったような気がしました。高津先生も高津先生で、これは私が東大の大学院でお世話になったころのことですが、のちに北大から一橋大学で哲学を教えた岩崎允胤さんと私と２人、たまたまその時分には同じ高校の教師をしていたので、毎週水濯日の午後、高津先生の『オイディプス王』の演習に出たのですが、高津先生はさっさと自分で読んで自分で訳して、ところどころ、言語的によほど注目する必要があるところだけ注釈をおつけになる、そんな授業でした。ですからその進度の速いこと速いこと。あるとき恐る恐る「先生は学生にあててやらせるということはなさらないんですか」と伺ったところ、「ぼくは悪い教育者だから、めんどくさいや。学生にやらせるといらいらするでしょ」とのことでした。もっと驚いたのはラテン語の授業で、はじめてラテン語をやる学生に文法は教えず、いきなりオウィディウスの『メタモルフォーセス』のテクストをタイプしガリ版印刷したものを学生に配って、それを読みながら文法事項の説明をなさっていました。「文法だけなんていうのはつまらないや。これで大丈夫だ、ラテン語はやさしいから」とおっしゃっていました。あとで風間喜代三さんに聞いたら、「さすがの高津さんも、ギリシア語はちゃんとまじめに文法を教えてましたよ」とのことです。しかし高津先生で特筆大書すべきは探偵小説と映画。映画はちゃんばら（ご参考までに、松平先生は断然西部劇です)、探偵小説は英米のペーパーバックもので、「京都へ行くと、片道に１冊ずつ、探偵小説を２冊もって行かなきゃならない」とのことでしたが、この探偵小説が機縁となって、大岡昇平が高津宅を訪れることになり、この交際は高津先生がお亡くなりになるまでつづきました。

＊＊＊

こうして、生活社の社員として先生方に顔を覚えていただけたころ、いよいよ「古典学会設立」の動きが表に出てくるわけですが、私がかかわりをもったのは昭和23年の夏からで、実はそれ以前に、田中・松平両先生と、おそらく東京の呉・高津・村川などの諸先生、それに東京本社の佐々木さんとこちらの兵藤さんの間で、着々と相談と準備が重ねられていたにちがいありません。というのは、私が兵藤さんからその時仰せつかった仕事は、古典学会設立趣意書の印刷・発送について松平先生とご相談するという、きわめて事務的なことだったのですが、そこに来るまでには、もっと本質的なことが考えられ、何度も討議が重ねられていたはずだからです。その討議がどこでどういう形で行われたのか、ほんの学生であった私にはまったく分かりませんが、少なくとも田中・松平両先生は東京の、その当時すでに現役では最長老の呉茂一先生、まだ若手だがすでに世に認められていた高津先生、同じく村川堅太郎先生ぐらいとは連絡をとりあっておいでだったにちがいない。村川先生のまことに貴重な翻訳『エリュトゥラ海案内記』というのが、今は中公文庫に入っていますが、これはその頃の生活社から出たもので、私自身これを京都と大阪の本屋さんに売り込みに歩きました。――趣意書の原稿をどなたがお書きになったのかも私は存じません。また、今ならワープロで原稿を作りますし、そのうえコピーなどという手段もありますが、当時は日本文を印刷するには活版印刷か、和文タイプライターで印字したものを謄写機にかけるかするのが唯一の方法だったし、いずれにしても手間とお金がかかることですし、発送するにも郵便代がかかるわけで、そういう事務的な手間とお金の面を生活社が引き受けることになって、それでこういうご相談ということになったはずです。とくに私が松平先生にお願いしたのは、この趣意書をお送りする先生方の名簿を作るための資料をくださいということだったと思います。また以上のことから、学会設立について旗振りとなっていたのは田中・松平両先生だったことも伺えます。ご参考までに、その時田中先生は45歳、松平先生は32歳です。

ところが困ったことに、私が松平先生からその資料をちょうだいしたのは確かなのですが、それがどういう資料だったか、あるいはそれをいただいてからどうしたかという記憶がないのです。たぶんそれを東京の生活社に送ったのだと思います。その名簿に何人ぐらいのお名前が載っていたのかも覚えておりませんが、私の記憶するかぎりでは、学会が発足した時会員数は70人か80人ぐらいだったと思いますから、そこから考えると、おそらく100人以上の方々にこの趣意書を送って参加を呼びかけたことになります。

時間的に言ってこれの次に私が覚えているのは、同じ年、つまり昭和23年の秋、京都・百万遍の養源院というお寺に先生方にお集まりいただいたことです。「古典学会設立のための打ち合わせ会」と銘打たれた会合で、朝から気分がうきうきするほどよく晴れた日曜日でした。本堂の畳敷きの広間に、まん中を広く空けて四角くお座りいただきました。その会の世話役である兵藤さんと、その下働きである私は、入り口近くの隅に座っておりました。昔の記憶というのは仕様のないもので、事の重要度とは関係なく、ほんの偶然に覚え

ているものなので、私がこの会合に関してはっきりと覚えているのは、ほかの先生方はともかく、呉先生だけはお出迎えに行った方がいいと兵藤さんに言われたことですが、その兵藤さんは、そのことを松平先生から言われて、私に「あなた行ってよ」と言い付けたのです。ところがその日お集まりの先生方のうちで呉先生だけ、私はお顔を存じ上げない。そこで私は前日に恐る恐る呉先生にお電話をして、何か目印になるようなものをお持ちくださらないでしょうかとお願いしたところ呉先生は、「それはどうも。わたくしは帽子に一高の徽章をつけてますからすぐ分かります」とのことでした。当時呉先生は旧制一高の英語の先生だったのです。当日お目にかかった時、先生はネズミ色のソフト帽のリボンに、金色に輝く一高の徽章をつけておいでで、たいへんにこやかに接してくださいました。呉先生というのはむずかしい方だと聞いていたが、結構愛想のいい先生ではないかと思ったものです。呉先生のむずかしさに困ったり笑ったりしたのはずっと後のことです。――もうひとつこの会合のことで覚えているのは、学会誌の名前についてで、松平先生が「『ヘルメス』というのが候補に上がっていますが、『ヘルメス』はすでにありますのでね」とおっしゃったこと、そして田中先生が「『ヘルメス』はあるな」と相槌を打たれたことです。それでどうなったのかは覚えていません。学会誌の名前よりも先に決めるべきことが山ほどあるので、この話はそれ以上続かなかったのだと思います。この会合の出席者は、東京からは呉・高津の両先生、このほかに村川先生がいらっしゃらないはずはないと思うのですが、覚えていません。兵藤氏によると、のちに比較文学の大御所になった島田謹二氏がおられたそうですが、私は全然覚えがない。京都からは田中・松平両先生のほか、泉井久之助、高田三郎、その高田先生の弟さんで同志社大学の高田武四郎、村田數之亮、野上素一、それに三高のフランス語の先生で林憲一郎先生。これから分かることは、「古典」をかなり広く解して多くの人々に呼びかけたということです。これは確かに一里塚という感じで、学会発足のための第一歩が踏み出されたわけですが、私が「９月卒業」を決めたために、兵藤さんが「あなた卒論大丈夫なの」と気を使い出し、本屋への売り込み、集金というような肉体労働は続けましたが、学会関係の事務的な仕事は、ほとんど兵藤さんが一人で対応したのです（念のために申し添えますと、戦争中に大学生の在学期間を２年半に短縮したために、９月卒業ということが正式なこととして定着して、戦後しばらくの間はそれがそのまま残っていたのです）。ですからこれ以後の学会と生活社のことは、私は何も存じません。

ただひとつ気になることがあります。それは今申しました「学会設立のための打ち合わせ会」の直後に、正確に言うと昭和 24 年の１月に、「昭和二十一年に華甲を迎えられた田中秀央先生に捧げる」として、西洋古典学会編『西洋古典論集』という 290 頁ばかりの本が大阪の創元社から出ているのです。創元社からは田中先生訳の『プロティノス　善一者について』、田中秀央・泉井久之助共訳の、今は岩波文庫に入っている『タキトゥス　ゲルマーニア』、また原随園先生の『ギリシア史研究』第一～第三がすでに出ていましたし、また田中・ 松平両先生共著の『ギリシア語文法』――これは現在の岩波全書の『ギリシア語入門』より先に書かれたもので、入門よりやや進んだところを簡潔にまとめた文法書です

――という本もやがてここから出ることになりますので、古典と無縁の出版社ではないのですが、一方で生活社の肝煎で学会設立を企てているときに、他方ではすでに「西洋古典学会」の名による論集が出ているというのは奇妙なことです。しかし松平先生から伺ったところから想像しますと、「西洋古典学会」を名乗ってはいるけれど、これは学会設立の運動とは無関係の、ほとんど泉井先生の個人的企画による出版だったようです。奇妙にはちがいありませんが、今となってはこの本をお持ちの方も少ないと思いますので、ご参考までに次にその目次をご覧に入れておきますと、

アルカディア出土碑文の性質	高津春繁
蛙鼠戦役	泉井久之助
ピンダロスの政治思想	原隨園
若き日のアリストパネース――ダイタレース――	松平千秋
古典としての新約聖書	神田盾夫
ヨハネ黙示録とその歴史的背景	井上智勇
倫理学者としてのアルベルツス・マグヌス	高田武四郎
聖アウグスティーヌスにおける哲学の概念	長澤信壽
ギリシア・アルカイク	村田數之亮
十日物語五日目第八話に就いて	野上素一
パルティア王朝史の成立	足利惇氏
祆教における善悪行の記帳について	伊藤義教
アンドレ・シェニエ	林憲一郎

なかなか大したものです。そしてここでも「西洋古典」という言葉がかなり広い意味で使われていることが分かります。

＊＊＊＊

私は９月に卒業して、早々に旗を巻いて東京へ帰ると、自分でも驚くほどのとんとん拍子で、母校である東京都立九段新制高等学校の教員になりました。ところがまさにそのころ、生活社の経営が破綻しかかったのです。先に申しましたように、経営も出版も素人だった社長の放漫経営に加えて、編集長の佐々木さんの強引さが裏目に出てしまったわけです。本当に倒産したのは翌昭和 25 年の春ですが、とにかく私が東京に戻った直後に、兵藤さんが松平先生をお訪ねして、生活社がお手上げになったと報告したようです。そこで乗り掛かった船が沈没しそうになったわけですから、いずれは田中先生を通じて岩波との交渉が始まることになるわけです。これもそうすんなりと運んだわけではなかったようですが、私はその経過をまったく存じません。上に見ましたように、創元社も古典とは多少かかわりをもっていたので、生活社がだめなら創元社ではどうかという案が、岩波に話をもって行く前にあったかどうか、それも存じません。松平先生もその辺の事情はよくご記憶

ないようです。

ここで一足飛びで恐縮ですが、昭和 31 年の夏に、つまり今までお話しました時から 7 年後に、私が松平研究室の助手として京大へ戻ってきたとき受けた強烈な思い出を一つだけ付け加えさせていただくことにします。この間に、はじめに申しましたように、松本仁助さんが学会の事務を取り仕切って、学会運営のレールがきちんと敷かれていましたが、われわれの学会が学術会議の公認団体として登録されたのは実は私が助手のときです。その申請のときのことです。ある日、私だけが部屋におりましたところへ、当時学術会議の会員だった桑原武夫氏から電話がかかってきて、「あんたらの学会から公認団体の申請が出とるけどな、『日本西洋古典学会』なんちゅう妙な学会名で申請されては困るな」。妙な学会名と言われて電話口できょとんとしておりますと、「日本の古典をやるんか西洋の古典をやるんか、それとも両方ともなんか、さっぱり分からんやないか」と重ねての仰せで、思わず笑いだしそうになったのをぐっとこらえて、「それは『日本・西洋古典学会』とお読みいただきたいのですが」と申し上げると、「そうか。だがな、まだあかんがな。だいたい学会名としてやな、『西洋の古典』ちゅうような漠然としたこというたらあかんな。古典いうたらラシーヌもあればゲーテもあるやないか」「恐れ入ります、も少し古いところなんですが」。今度はあちらがきょとんとなさったようでした。それからもう一度別の日に、今度は「あんたらの学会の英訳名やがな、Classical Society となっとるが、この英語では『古典学会』ではのうて『古典的学会』ということになるんとちゃうか」とおっしゃいました。その時は松平先生も部屋においでになりましたので代わっていただいて、「英国の古典学会も Classical Association と申しますので、それで行けると思いますが」とご返事してくださいました。「英国の古典学会も・・・」と言われては、桑原氏もそれ以上は何も言えなかったのだと思います。――あれからすでに 40 年以上たちましたが、「古典」に関するかぎり、状況は今もほとんど変わっておりません。つまり、ヨーロッパで古典といえば、シェイクスピアやラシーヌにとって「教養」であったギリシア・ローマのことに決まっているという認識が、いまだに根づいていないということです。なぜそうなったのかは、まじめに考察するに値する問題だと思いますが、しかしこれ以上お話をしてまたどなたかの悪口を言ってはいけませんので、私の駄弁はこれで終わりにさせていただきます。失礼いたしました。

西洋古典学と、哲学の再生
──回顧と展望──

藤 澤 令 夫

一

「日本西洋古典学会」は1950（昭和25）年に創設されました。きょうの講演会の全体テーマは、「日本における西洋古典学の50年」となっていまして、学会創設の年から今日までの50年間における、日本の西洋古典学の推移なり発展なりを顧みるというのが、その趣意であると思われます。そこで私は、ちょうど 20 世紀の中間点である学会創設の年、1950年から、逆に歴史を50年さかのぼり（1900年）、さらにまた50年をさかのぼって（1850年）、19世紀の中ごろの日本の状況をふり返ることから、共通テーマの趣意に沿った話を始めたいと思います。

19世紀の中ごろというのは、時あたかも、日本が長年の鎖国を解いて、西洋の文明と学問を積極的に摂取し始めた時期に当ります。アメリカのペリーやロシアのプチャーチンが相ついで浦賀・長崎に来航したのは1853年のことですが、日本人が西洋の学問を部分的・断片的にではなく、初めて組織的・系統的に学んだのは、1855 年から 59 年にかけての海軍伝習所と、1857年の医学伝習所（共に長崎）においてであったと言われております。

こうして、1950年の日本西洋古典学会の設立は、日本が西洋の学問を積極的に受容し始めた大体の時期、19 世紀の中ごろから、ちょうど 1 世紀たった後ということになります。その100年間におけるわが国の文明と学問の状況を省みる中で、西洋古典学会創設の意味するところや、その今後の課題がおのずから照らし出されるであろうというのが、私の目論見であります。

では、学会設立の100年前のころ、わが国はどのような意図と態度のもとに、西洋の文明と学問を取り入れたでしょうか。

中国における阿片戦争（1840-42年）の例もあることですし、英・米・露・仏・蘭の列強諸国が群がり来る中で、何としてでも国の独立と国益を守り抜かなければならない。そのためには、とにかく一刻も早く西洋文明の最先端部分、特に日本がひどく遅れている科学と技術を習得して、近代化と国力増強を急がなければならない。これが日本の開明派の指導者たちにとっての、緊急の課題でありました。すなわち、国策として「富国強兵」。学問への態度としては鮮明な「実学」志向。そして心構えとして「和魂洋才」。

これらのスローガンはおよそ西洋古典学というものからは、最もかけ隔たったところを指し示しています。西洋古典学などをやっていたら、日本は植民地にされてしまうと思われたかもしれません。いやおそらく、「西洋古典学」（classics, classical philology）という学問があることさえも、当時の日本人は知らなかったでしょう。

しかし、科学を生み出した西洋の学問にも、その伝統を培ってきた「魂」があります。淵源にあるギリシア・ローマの精選されて今日まで伝えられた古典は、そのような「魂」

の具体的な在処（ありか）と申せましょう。しかし、幕末から明治最初期の日本の識者は、「魂」のほうは和製でまかなって、西洋の学問からはもっぱら、実益をもたらすその「才」を摂取すればよいと信じていました。このような「魂」と「才」との明確な区別と役割分担の意識の現われが、「和魂洋才」の掛け声と「実学」志向にほかなりません。

西洋の文明と学問の受容開始の当初におけるこのような姿勢は、のちのちまで尾を引きますが、さし当って明治政府が学問の府としての大学を設立したときにも、はっきりとその姿勢が受け継がれました。1877 年（明治 10）年に創立された東京大学は 1886（明治 19）年に公布されました「帝国大学令」によって、帝国大学と改められますが、その際、大学は「國家ノ須要ニ應スル學術技藝」（帝国大学令第一条）――つまり国家のために実際の役に立つ学問と技術――を習得する機関であるべしという理念のもとに、実用の学のひとつの典型である工科大学（工学部）が、その中に置かれることになりました。専門学校でなく、総合大学が工学部を持つということは、それまで世界に全く前例のないことだったのです。

京都帝国大学の創立は 1897（明治 30）年でありますが、これもまず同年に理工科大学（理工学部）として出発しております。そして２年後に法科大学（法学部）と医科大学（医学部）――どちらも実学です――が開設されるという段取りとなりますが、西洋古典学の居場所となるはずの文科大学（文学部）が出来たのは、京大創設後９年もたってから、やっと 1906（明治 39）年のことでした。ちなみに、実際に文学部が西洋古典学の“居場所”となるのは――つまりそういう名称の講座が文学部内に正式に開設されるのは――ずっとずっと遥か後の戦後になってから、学会の創設よりもさらに遅れて、京都大学では 1953（昭和 28）年、東京大学では 1963（昭和 38）年を待たなければならなかったのです。

とまれ、当初はいわば急場しのぎだったこうした方策を勤勉に実行したおかげで、当面の目的だったことは、何とか達成することができたといえるでしょう。日本は急速に近代化を進めて国力を強め、西洋文明の輸入を始めた 19 世紀半ばからほぼ 40 年後には日清戦争（1894-5 年、明治 27、8 年戦役）に勝利し、その 10 年後には、大国ロシアを相手の国運をかけた日露戦争（1904-5 年、明治 37、8 年戦役）に曲りなりにも勝利して、世界を驚かせました。日本は、少なくとも日本人自身のつもりでは、文明国あるいは“一等国”の仲間入りをすることになって、世はいわゆる「文明開化」の時代を迎えます。

二

しかし、 そのようにして実現された文明開化とは、どのような「開化」だったでしょうか。ちょうど夏目漱石が、日露戦争が終わってから６年後の 1911（明治 44）年に、「現代日本の開化」と題する講演を行なっていますので、その言うところを聞いてみましょう（以下引用文の表記、かな使い等は今日慣用のものに改めてある）。

漱石はまず、

「西洋の開化（即ち一般の開化）は内発的であって、日本の現代の開化は外発的である」

「西洋の開化は行雲流水の如く自然に働いているが、御維新後外国と交渉を付けた以後の日本の開化は大分勝手が違います」

と言って、こう説明します。

「今まで内発的に展開して来たのが、急に自己本位の能力を失って外から無理押しに押されて否応なしにその云う通りにしなければ立ち行かないという有様になったのであります」

ではその結果として、日本の開化はどのような特徴を呈しているのか。漱石は言います。

「今の日本の開化は地道にのそりのそりと歩くのでなくって、やっと気合いを懸けてはぴょいぴょい飛んで行くのである。開化のあらゆる階段を順々に踏んで通る余裕を有たないから、出来るだけ大きな針でぼつぼつ縫って過ぎるのである。足の地面に触れる所は十尺を通過するうちに僅か一尺位なもので、他の九尺は通らないのと一般である」

「日本の現代の開化を支配している波は西洋の潮流で、その波を渡る日本人は西洋人でないのだから、新しい波が寄せる度に・・・・・今しがた漸くの思で脱却した旧い波の特質やら真相やらも弁えるひまのないうちにもう棄てなければならなくなった。食膳に向って皿の数を味わい尽す所か、元来どんな御馳走が出たかはっきりと眼に映じない前にもう膳を引いて、新しいのを並べられたのと同じ事であります」

「これを一言にして云えば、現代日本の開化は皮相上滑りの開化であるという事に帰着するのであります」

このような開化の行方は、どうなるのでしょうか。漱石の語りには、苦渋が滲み出てこざるをえません。

「しかしそれが悪いからお止しなさいというのではない。事実已むを得ない涙を呑んで上滑りに滑って行かなければならないというのです」

「とにかく私の解剖した事が本当の所だとすれば、我々は日本の将来というものに就てどうしても悲観したくなるのであります」

御承知のように漱石には「ケーベル先生」「ケーベル先生の告別」という小品の文章がありまして、ケーベルと親しかった様子がうかがわれます。ラファエル・フォン・ケーベルは、日清戦争の前年 1893（明治 26）年から 1914（大正３）年まで東京帝国大学で哲学を講じましたが、その間哲学とともに、日本で初めてギリシア語やラテン語と西洋の古典を学生たちに教えました。波多野精一、田中秀央、久保勉といった方々はその弟子に当ります。日本における西洋古典学やギリシア哲学研究の歴史が振り返られるときには、最初にこのケーベルに言及されるのが常であることは、御存知のところでありましょう。

漱石は英国留学時（1900-1903 年）の経験によって、西洋古典の存在の重さを熟知していたと思われます。岩波版『漱石全集』の「総索引」を一覧しますと、漱石がいかにその作品中にホメロス、アイスキュロス、ソポクレス、プラトン、アリストテレス、ウェルギリウス、ホラティウスなどのギリシア・ローマの詩人や哲学者によく言及しているかを知ることができます。彼はケーベルのことを、「そっと煤烟の巷に棄てられた希臘の彫刻に血が

通い出したようなもの」と形容していますが（「ケーベル先生」）、もともと見識の深い漱石は、さらにこのケーベルと親しく接することを通じて、西洋の学問・文明を育んできた母胎（マトリクス）としての「魂」の何たるかを、必ずやよく承知していたに違いありません。「皮相上滑りの開化」とは、最も基本的には、西洋のそういう精神的基盤には全く目が向けられていないことを意味するでありましょう。

一般に、「富国強兵」「和魂洋才」といった掛け声で推進される「開化」は、先に見ました東京・京都の帝国大学の設立経過にも如実に現われていますように、摂取する西洋の学問のうち、どうしても理工系の学問を優遇し、文科系の学問――実学的性格をもつ法科や経済はともかく、文学部のそれ――を冷遇する圧力として働くことになります。このような状況の中では、ケーベル先生の日本人門下生たちに始まるギリシア・ローマの原典学習の気運はたしかに一つの心強い水脈を形づくるようになりますけれども、しかしそれが「西洋古典学」という独立した学問としての地位を国内で確立するだけの勢力となりえなかったのは、致し方のないことだったでしょう。

ただし、旧制の高校や大学に学ぶ当の学生たち――理科系の学生も含めて――が「教養」として異常なまでに熱心に求めたのは、哲学・文学・歴史などの、まさに文学部的な洋学の教養でした。この現象は、国家社会全体が採択した上述のような方策と、不思議なコントラストをなしています。

ただこの旧制高校的教養も、西洋の哲学や文学の最基層をなしている本来の意味での古典にまで、目が据えられていたとはいえないでしょうから、総じてやはり、「皮相上滑り」の域にとどまっていたのが実情だったかもしれません。

いずれにせよ日本の知的状況は、習い性となったかのごとく、大勢としてはその後もずっと「皮相上滑りの開化」のままで、漱石の言い方を借りますと「涙を呑んで」（かどうかは別として）「上滑りに滑って」行ったように思われます。そして、「開化」を支えるべき知性のそのような底の浅さに乗じて――と私は思っているのですが――軍閥が横暴をきわめて国の政治を壟断するようになり、やがて漱石の上記講演から 30 年後（1941 年、昭和 16 年）には、無謀な「大東亜戦争」に突入することになります。「日本の将来というものに就てどうしても悲観したくなる」という漱石の暗い予感は、まずここで、あまりにも鮮明な現実となりました。

ちなみに、学問についての明治以来の国策――理工系重視、文科系軽視――は、緊迫した戦時下では、露骨きわまりない形をとって現われました。成年に達した文科系の学生だけに課せられた徴兵猶予停止の措置、いわゆる「学徒出陣」（第 1 回「出陣」が 1943 年、昭和 18 年 12 月）がそれであります。つまりこれは、ありていに言ってしまいますと、理工系の学生は「國家ノ須要ニ應スル學術技藝」――この場合は戦争に役立つ学問ということになるでしょうが――を学んでいるのだから、そのまま勉学を続けてもよい、しかし文科系の学生は不要だから、戦争に行って死んでこい、という命令にほかならないのですから。

こうして日本は、1945（昭和 20）年８月に敗戦を迎え、19 世紀半ば以来の「富国強兵」

の企図は潰(つい)え去りました。少なくとも、それまでのぎらぎらとした「強兵」の目標は、完全に粉砕されたのであります。

三

さて、私の講演の題名は「西洋古典学と、哲学の再生」となっていまして、これからしばらく哲学にかかわる局面のことをお話したいと思いますが、その際話はどうしても、私自身の体験や思いに即した、私の個人的な視点からの話にならざるをえませんので、その点はどうかお許しください。

哲学（philosophia）という営為は、本来ならば文明や学問の中核にあって、その動勢を批判的にチェックする機能を果さなければならないはずであります。しかし戦前・戦中――それは哲学流行の時代だったのですが――の哲学界は、これを大局的に俯瞰いたしますと、明治以来の「開化」を支配してきた上述のような風潮に、それ自身が呑みこまれてしまった観があります。

すなわち日本の哲学界は、いわば一日も早く「近代化」を果すために、西洋の哲学の最先端部分――ドイツ観念論、新カント派、現象学、生の哲学、実存哲学、マルクス主義の哲学、等々――を学習するのに忙しく、哲学の伝統を培ってきた基層の「魂」に目を向ける余裕も意志もない。同時にまた、「和魂洋才」的な構えのもとに、わが国独自の“独創的”な哲学思想を作り上げようとして、そうした西洋最新の哲学に対する反射的反応による思いつきを、難解な和製哲学用語を駆使して論説化する。――もちろんすぐれた例外はあるにしましても、これが遠目で俯瞰したときに見える、戦前の哲学界の全般的な情景と言って差し支えないと思います。違った見解の人たちもいるでしょうが、これが私の偽らざる所感であります。

ですから、先に引用しました漱石の「現代日本の開化」の中の言葉は、「開化」という語を「哲学」に置きかえて読みますと、すべてそっくりそのまま、明治以来の日本の哲学界の一般状況を語っているように私には聞えるのです。例えば、「元来どんな御馳走が出たかはっきり眼に映じない前にもう膳を引いて新しいのを並べられたと同じ事」という件(くだり)など、海外の最新流行の思想を追うのに忙しい日本の「皮相上滑りの哲学」の様子を、まさに言い得て妙、と膝を打ちたくなります。

戦前、哲学の論文が発表される雑誌として一般にも権威を持っていましたのは、今と違って純哲学雑誌であった『思想』でした。その 1939（昭和 14）年 10 月号は、「文化創造と文化混淆」と題する特集号でしたが、これに載った諸論文について、小林秀雄が批評文を書いていますので（「学者と官僚」『文藝春秋』同年 11 月号―原文は旧かな使い、正字）、小林がどう評しているか、見てみましょう。

批評の対象となったのは、例えば次のような文章です。

「現代における新しき文化は個人を超越する国民協同体の文化として創造さるべきもので、そこにははたらきとしての教養的文化となりわいとしての技術的文化の統一が必要

である」「人間は理性的なる文化を外に建設することによって――それは悟性と技術に媒介されている――自らを真に理性的とするのである。理性は単なる否定ではなく、否定の否定であり、即ち構成的なのである」

「近世は中世への革新として自らをそれに対立せしめることによって古代とつながり、吾々の現在がそこから始まるものとして現在の制約であり、それ自身に於て過去と未来との統一であると共に、吾々に対して過去と現在との媒介をなす」

どれもみな昔懐かしい（?）語り口ですが、小林はこれらのほかにも、幾つかの似たような文章を同じ『思想』から引用した上で、こう極め付けています。

「よくも揃いも揃って、寝言の様な事を言っているものだと呆れ果てた」

「表現の事事しさと内容の空しさとのコントラストは、まさにグロテスクと形容するより他はない」

「こんな文章が集まって一貫した処なぞ読まされて見給え。大概の忍耐なぞはケシ飛ぶのである。・・・・・この様な断片から推察される文章が、果して日本人の文章と言えるだろうか」

手きびしい言い方ですが、実際にその通りなのだから仕方がありません。上に示した文章の例には、西洋哲学の用語を歴史的な内実理解を抜きにして漢字に置換した、難しい和製哲学用語はあまり見当りませんが、それが縦横に織り込まれますと、「表現の事事しさと内容の空しさとのコントラスト」は、いっそう際立ちました。私はかなり早く、旧制中学の上級生のころから、何となく哲学志望だったふしがあるのですが、名の知られた現役の哲学者たちの論文に接するごとに、こういう特殊な言い回しを身に着けないと日本で哲学はやって行けないのだろうかと、はなはだ心細い思いをしたものです。

戦前・戦中のこうした思想界において一世を風靡していたのが、京都帝国大学の哲学科を中心とする、「京都学派」と呼ばれた学者集団でしたが、その頂点にあって、彼らおよび一般の哲学徒からほとんど絶対的な尊崇を集めていたのは、西田幾多郎でした。

小林秀雄も、上述の同じ評論文の中で、西田幾多郎をその亜流から区別して、「恐らく日本の或は東洋の伝統的思想を、どう西洋風のシステムに編み上げるべきかについて本当に骨身を削った」思想家であると評価し、西田が「わが国の一流哲学者」であることを認めています。

しかし小林は続けて言います。「だが、この一流振りは、恐らく世界の哲学史に類例のないものだ。氏の孤独は極めて病的な孤独である」と。そして西田の仕事のあり方に「悲劇」を見て取りました。すなわち、

「西田氏は、ただ自分の誠実というものだけに頼って自問自答せざるを得なかった。自問自答ばかりしている誠実というものが、どの位惑わしに充ちたものかは、神様だけが知っている。この他人というものの抵抗を全く感じ得ない西田氏の孤独が、氏の奇怪なシステム、日本語では書かれて居らず、勿論外国語でも書かれてはいないという奇怪なシステムを創り上げてしまった」

私は西田幾多郎の人格と見識を敬愛することでは人後に落ちないつもりでありますし、平明な自然体の文章で書かれた彼の随筆や思想的エッセイはその人格と見識がおのずから滲み出ていて、私の愛読するところであります。

私のやっていることに関係のあるものでは、例えば「プラトンのイデヤの本質」という文章を読みましても、最近の低調な欧米のプラトン学者などよりも、ずっと正確にプラトンの哲学とイデア論を受けとめているように思えます。「ギリシア語」という短文には、すでに高齢の西田が、ギッシングの『ヘンリー・ライクロフトの私記』に出てくる一句――「かりに現存するギリシア語で書かれた本が、クセノポンの『アナバシス』一つだけであったとしても、それを読むためにギリシア語を学ぶ価値は大いにあるだろう」――に発奮して、White, First Greek Book を使ってギリシア語の勉強を始めたことが書いてあります。「二、三年そういう風にして心がけてみたが、とうとう物にならずにやめてしまった」 ということになるのですが、その発奮と勉強ぶりには大いに敬意と親しみを感じざるをえません（西田の随筆の類は、今では上田閑照編『西田幾多郎随筆集』(岩波文庫)の中に読みやすく編集されています)。

けれども、西田幾多郎が肩に力を入れて正面切って書いた哲学上の論文や著作の文章となりますと――『善の研究』は一気に読み通した記憶がありますが、それ以後の論文や著作は後になるほど――地道な思考を守ろうとすると全く理解を超えるような、飛躍や短絡に随所で行き当って、私にはどうしても素直に付いて行けません。もちろん、まさにその点に深い意味を読み取ろうと努力する人々も多く、それゆえに「西田哲学」は今も声望が高いことは承知しております。しかし私は、そういう努力をする気になるよりも、先に引用しました小林秀雄の評言が実情を言い当てていると思われ、そのほうに賛同せざるをえないのであります。

小林は、亜流に対してはよほど腹に据えかねたのか、西田への評言に続けて、返す刀でもう一度毒舌を向けています。

「言う迄もなく亜流は魂を受け継がぬ。専ら健全な読者を拒絶する為に（他に理由はない）何処（どこ）の国の言葉でもない言葉を並べ、人間に就いて何一つ理解する能力のない、貧弱な頭脳を持った哲学ファンを集めた」

「大概の忍耐なぞはケシ飛」んで癇癪を起したあまり、いささか言葉が過ぎるようですが、しかし“哲学全盛時代”と言われた戦前・戦中のわが国哲学界への批評として、見当が違っていないことは確かでありましょう。

四

小林秀雄の批評は哲学界の外から第三者としての批評でしたが、自分が書く哲学論文そのものの内実によって、従来の日本の哲学のあり方に強くプロテストしたのは、田中美知太郎でした。

上記の雑誌『思想』は、昭和 10 年代の後半にさしかかるころから、戦時下の紙の統制の

ためにしだいに薄くなり、掲載論文も２、３本どまりになります。その『思想』に、36 歳から 42 歳にかけての田中の論文は、高名の大家の論文と並んで、次々と発表されて行きました。論文題名を年代順に挙げてみますと、「ロゴス」（1938〔昭和 13〕年）、「ミソロゴス」（1939〔昭和 14〕年）、「時間」（1941〔昭和 16〕年）、「現実」（1942〔昭和 17〕年）、「未来」「名目」「過去」「イデア」（1943〔昭和 18 年〕）、「技術」（1944〔昭和 19〕年）などがそれです。昭和 19 年 10 月号（実際に出たのは 20 年に入ってから）の『思想』は、西田幾多郎の「生命」㈠と田中の「技術」㈡の２本立てで、これが戦時中に出た最後の『思想』でした。

田中のこれらの哲学論文は、西洋の古典を広くしっかりと踏まえて、ギリシア哲学はもとより、ヘシオドス、ギリシア悲劇、ツキュディデスの歴史書などを自在に組み入れながら、哲学の基本問題を平明な文章で論述していて、私がそれまで見馴れていた哲学論文とは、雰囲気と安定感が全然違っていました。論文２本立てか３本立ての掲載であるだけに、いっそうその違いがコントラストをなして、強く印象づけられたのでしょう。私には、哲学をめぐるそのころの先に述べたような何か窒息しそうな状況に、蘇生の風穴が明けられたように感じられました。

上記の論文のうち、年代順に言って「ロゴス」から「イデア」までの８篇は、戦後に『ロゴスとイデア』（1947〔昭和 22〕年、岩波書店）にまとめられて刊行され、毎日新聞社の出版文化賞を受賞しましたが、その「あとがき」を読みますと、著者が当時の哲学界のあり方に対して、どのような思いをいだきながらこれらの論文を執筆していたかが、強く伝わってきます。

「自己独特の思想などを誇るのは、浅薄な虚栄心に過ぎず、前人未踏の新奇をもとめる功名心は、哲学の動機としては、甚だ俗悪であると言わなければならない」

「私は人々がとうに卒業してしまったと考えている古人プラトンの亜流であり、旧式なプラトン主義者である（cum Platone malo errare）として嗤われることをむしろ誇りとする。しかしわが国には未だかつて、プラトンやアリストテレスの哲学が伝統となったことはないのである。人々が時代の先端に立とうとしたり近代精神の基礎を築いた人たちの真似をしようと思っても、それが滑稽な猿真似に終らなければならない空しさは、いったい何によるのか。私たちの猛省すべき問題がそこにあるのではないか」

「滔々たるわが国哲学界の外に立って、私は自己を一個の素人であると感じなければならなかった。もし過去の哲学の歴史を築いた偉大な人たちの書物が、私の貧しい思考も正統の哲学と無縁ではないことを教えてくれるのでなかったならば、私は自己の哲学を否定しなければならなかったであろう」

「滔々たるわが国哲学界の風潮」をなす従来の哲学論文を、田中は、「そのあるものは通俗思想を特殊語に翻訳しただけのもの」あるいは「雑然たる読書の刺激によって生じた感想や思いつきを綴った、いわゆる悪戦苦闘のドキュメント――実は一種の読書ノートに過ぎないもの」と評して、自分の論文はそれらとは全く異なって、「自分だけの問題を読者にも理解してもらうために、プラトンの先例にならって、問題そのものの出来るだけ分りや

すい取扱い方を、いろいろと工夫しなければならなかった」と自負しています。哲学界に対するこうした評言は、上述の小林秀雄の批評と通底していると申せましょう。

田中は、敗戦の年 1945（昭和 20）年の 5 月 25 日、その日の東京大空襲によって、医者が臨終を宣告したほどの重症の大火傷を負い、人事不省のまま生死の境をさまよったのち、2 週間後にようやく意識を取り戻して蘇生します。田中の『時代と私』によりますと、病院の一室で意識を取り戻してから「そこで 6 月 7 日の西田幾多郎の訃を聞いた」ということですから、田中美知太郎の蘇生（5 月 25 日から 2 週間後）は、奇しくも、西田幾多郎の逝去（6 月 7 日）とほぼ入れ違いだったわけです。

同書で田中は続けて、「そう言えば、〔空白の２週間中の〕夢のような幻想のなかでも、わたしは西田さんに行き遭ったようで、先生は何か詫び言のようなことを言われたみたいだった。むろん内容は記憶にないが、弁解めいた口調の弱さをそう感じたのかもしれない」と書いていますが、この辺の経緯は、何か象徴的な感じがしないでもありません。もちろん田中自身は、この「幻想」については、「といっても、これは夢の中の妄想であるから、特別の意味を考えるようなものではないだろう」と断わっていますけれども。

京都大学の哲学科は戦後まもなく、何人かの教授スタッフが戦時中の戦争協力のかどで公職追放の措置を受けて退職し、代って 1947（昭和 22）年に田中美知太郎（東京文理大学講師）、高田三郎（広島文理大学教授）、野田又夫（大阪高等学校教授）の三先生が、それぞれ古代、中世、近世の西洋哲学史の担当として京大文学部に着任され、陣容が一新されました。

私は敗戦後 1 年たってから、1946（昭和 21）年の 7 月末に満州（中国東北部）から復員してきまして、留守中に学籍は三高文科から京都大学文学部哲学科に移っていましたが、旧「京都学派」に対しては、先に述べましたその学風のことに加えて、戦時中に無謀な戦争に同調する気配があったことに対しても、おかげでひどい目にあった敗残兵の一人として、怨念をいだいていましたから、教授陣の陣容一新をむしろ歓迎する気持が強かったのではないかと記憶しています。

ただしその昭和 22 年から 23 年ころ私は、外地でのおぞましい生存闘争のあとの虚脱感に埋没していまして、新しい先生方の授業にも出る気持になれず、一人籠って暗中模索の日々を過していました。その間にしかし、哲学はやはり本源のギリシアを踏まえた正統を歩むのでなければ、自分自身の内奥の問にほんとうに答えることはできないのではないかと、しだいにそう思うようになって行きました。こうして、復員し復学してから２年余りを経たのち、ようやく本式にギリシア哲学を専攻することに決め、1949（昭和 24）年から、田中門下の一人として演習に出席するようになったわけです。

これにはもちろん、田中美知太郎先生の着任が大きな誘因であったのですが、同時にまた、私自身の模索の決着としては、満足を棄てて決意を採る――ギリシア・ ラテンの原典への本格的習熟を必須条件として哲学することは難業であろうけれども、しかし 100 の粘土像は 1 箇の大理石像に及ばないと観じて、粘土細工的な気ままな思考を斥け、大理石の硬材を刻むように哲学することを選び取ろう、といった思い入れでありました。

五

田中美知太郎先生は――これは語学や文学の研究者ならぬ哲学者としては、全く稀有のことと思いますが――古典ギリシア語の文法書・入門書を執筆するというくらい（『ギリシア文法提要』鉄塔書院、昭和 6-7 年、『ギリシア語文法』（松平千秋と共著）創元社、昭和 25 年、『ギリシア語文法』（松平と共著、創元社版の大幅な改訂版）岩波書店、昭和 43 年、『ギリシア語入門』（松平と共著）岩波書店、昭和 26 年）、基本の第一歩のためにも尽力を惜しまなかった方でした。これは私などには、とうてい真似できないことです。そういう田中先生が、先に申しましたような論文の書き手としても、「西洋古典学会」という学会をつくることにとり分け熱心であったのは、きわめて自然のことでありましょう。

こうして 1950（昭和 25）年、田中のほか呉茂一（初代委員長）、高津春繁、村川堅太郎など、先ほどの柳沼さんのお話に出てきた方々が中心となって、「日本西洋古典学会」が設立される運びとなりました。京大のまだ若手教官だった松平千秋助教授の研究室に、事務局が置かれました。冒頭に申しましたように、それは日本が西洋の学問と文明を摂取し始めて以来、ちょうど 1 世紀後に当ります。その西洋の学問と文明の一番の根もとを研究する学会の設立としては、何という長い遅延だったことでしょう。

同年の 10 月 22 日、当時の京大文学部第８教室において、その発会式および第１回総会――といっても外見は普通の公開講演会と変りませんでしたが――が行なわれ、田中門下となって２年目の学部学生だった私は、一般聴衆の一人として、教室の机に坐って聴講いたしました。発会式の次第は、

開会の辞：高田三郎

祝辞：新村出、田中秀央

公開講演：高津春繁・ 東大助教授「ギリシア散文の発達」

田中美知太郎・京大教授「哲学の言葉としてのギリシア語」

というものでありました。残念ながら、二つの講演の内容は何も憶えていません。

少し遅れて 1953（昭和 28）年に、学会誌『西洋古典学研究』が岩波書店の協力を得て創刊され、巻頭論文として田中美知太郎「古典研究における解釈の問題――プロクロスの註釈から」が掲載されたことは、御承知の通りであります。以来引き続き岩波書店を版元として、10 篇余の研究論文と充実した書評を載せて年１回の発行を重ね、今春出た最新号で第 47 号となりました。

他方、前にちょっと触れましたように、はなはだ遅ればせながらも、1953（昭和 28）年には京都大学文学部に「西洋古典語学・西洋古典文学」という講座が、また 1963（昭和 38）年には東京大学文学部に「西洋古典学」が「専修」として、それぞれ正式に設置されました。実質的にはそれまでも、その教育・研究は両大学で行なわれていましたが。

このようにして、１世紀の長きにわたって致命的に不在であった、西洋の学問と文化の最基層を本格的に学ぶための拠点が、全国学会と大学の講座の設立によって、ようやく確

保されるに至ったのであります。

以来50年、学会の活動と大学での教育・研究とが相まって、今ではこの道の研究者の層の厚さ広さは、昔日の比ではありません。日本西洋古典学会の会員は、1951（昭和 26）年に作られた最初の名簿では125名でしたが、最新の会員名簿（1998年7月）では552名を数えるに至っています。年に１回開かれる大会の内容も、初期と比べると格段の充実が見られます。例えば、学会誌『西洋古典学研究』第２号の終りに「会記」として、1953（昭和28）年に慶応義塾大学で行なわれた第４回大会の報告記事が出ていますが、それによりますと、そのころは大会は１日だけ、研究発表２つ（原納一富「クセノパネースについて」、弓削達「所謂“ミラノ勅令”について」）と公開講演２つ（松本正夫「アリストテレスの εἶναι ἁπλῶς と εἶναί τι について」、泉井久之助「アレクサンドレイアの図書館」）という、今と比べればまだ細々としたものでした（ただし懇親会は屋台など出て、きわめて華やかで充実、さすが慶応と唸らされたのを憶えています）。

現在では、御承知のように、大会は２日間にわたって行なわれ、10の研究発表と、ときにはこれに加えて公開講演やシンポジウムがありますから、格段の違いと申せましょう。1998年大阪市立大学で５月30日、31日に開催された第49回大会では、10の研究発表に加えて、「説得」というテーマでシンポジウムが４時間にわたって行なわれたことは、まだ記憶に新しいところであります。

また、京都大学学術出版会は、現存するギリシア・ラテンの古典すべての悉皆邦訳をめざす「西洋古典叢書」を、1997（平成９）年６月から刊行しつつありますが、すでに1999年４月にはその第１期分、多くは本邦初訳の15冊の出版が完了し、続いて2000年５月から、第２期分31冊の刊行を始めることになっています。これなども、哲学・史学・文学にわたる日本の西洋古典学の実力が蓄積されて、信頼できる訳者が得られるようになったからこそ、発足することのできた事業でありまして、おそらくちょっとさかのぼって2、30年くらい前ならば、学問的水準を堅持したこの類の叢書の発行に踏み切ることはできなかったでしょう。

六

さて、このように日本の西洋古典学は今日、学会が創設された50年前と比べて――まして無きに等しいくらいに影が薄かった明治から戦前までのころに比べるならば――瞠目すべき隆盛を得ていることは事実であります。しかしこの事実だけに目を向けて手放しで喜ぶのは、早計といわなければなりません。もちろん、会員数600名足らずという学会は国内でもまだ弱小学会であるとか、あるいは、欧米と比較して古典文献学としての全体的レベルはまだ見劣りがする、といったこともあるでしょうが、私がいま特に注意を喚起したいと思っておりますのは、日本の西洋古典学会は今日、反省と心構えを新たにしなければならないような、内憂外患ともいうべき状況に直面しているのではないかということであります。

「内憂」――つまり西洋古典学自身として憂慮し反省しなければならない事態――と私が考えておりますことの大きな一つは、西洋で19世紀の半ばごろから顕著になって現在ますます進行中の、学問の専門分化あるいは細分化ということが、西洋古典学の内に引き起しつつある負の効果であります。

その一つの現われは、西洋古典を構成する哲学・史学・文学の領域間の統合が稀薄になり、相互に離ればなれになってきたことに見られます。大会における研究発表の状況を見ましても、その発表が哲学関係であるか、史学関係であるか、文学関係であるかに応じて、そのつどフロアの聴衆の多くが入れ替わるのが目立つようになりました。

いつか伊藤貞夫先生が閉会の辞のなかで、私（藤澤）が以前は哲・史・文の領域を越えて盛んに質問していたが、最近は人柄が円満になったのか、あまりそれが見られなくなった、というようなことをおっしゃって、私をからかわれたことがありますが、これも――私が円満になったのは紛れもない事実ではありますが――専門分化が進んで、よその領域のことには口を出しにくくなったことが、主な原因なのであります。

細分化の現象は、哲・史・文のそれぞれの内部にも見られますが、こうした事態の背景には、今では一つ一つの研究主題についての文献（既発表論文・著書）が、加速度的に増加しつつあるという事情があるでしょう。このこと自体は学問の進歩発展の徴証といわなければなりませんから、専門分化あるいは細分化は、一概に悪いことだとはいえないかもしれません。きょう伊藤先生がお話になったマックス・ウェーバーも、『職業としての学問』（1919年）において、学問がかつて見られなかったほどの専門化の過程にさしかかっている現在、学問上の業績達成のためには、「自己の専門に閉じこもること」が絶対に必要であると強調しています。

けれども、少なくともわれわれの場合、「西洋古典学」とは哲学・史学・文学のインテグレイション――一体的な統合をこそ、その本来のあり方とする営為であって、けっして西洋古代哲学会、西洋古代史学会、西洋古代文学会の単なる寄り集まりではないはずですから、上に申しましたようなディスインテグレイションは、やはり望ましからぬ状態であるといわなければならないでしょう。特に、西洋古典学が今日日本において直面している「外患」的な状況を考えるならば、そのことは強調されなければならないと思いますが、それがどういうことかは後でお話します。

もう一つ、古典の研究においても往々にして見られる、ある種の最先端至上主義のことに触れておきたいと思います。昔から、ギリシア悲劇のマルクス主義的解釈といった類のアプローチはよくありましたが、哲学のほうで申しますと、プラトンなりアリストテレスなりの哲学について考察するのに、西洋のいわゆる現代哲学の先端で流布している論説を――それを参考にして考えるのは一向に差し支えないとしましても――むしろそれを基準とし手本として、それに合わせて解釈したり、あるいは批評したりする風潮が一部に見られます。

これは海外の学界でもよく見られるところでありますが（日本の学者はそれを見倣ってい

る気配があります)、やはり本末転倒といわなければなりますまい。本来は、プラトンならプラトンのほうを基準とし手本として、現代に流行している哲学思想を判定し批評すべきであり、それこそが古典を研究する者の責務なのであって、事実古典は、それだけの内実と重量を持っているはずであります。それを受けとめ経験するのでなければ、古典を学ぶ意味がありません。

七

最後に、以上取り上げましたような「内憂」に呼応する「外患」とも称すべきものを――すなわち、日本の西洋古典学が今その中におかれている環境が、古典に敵対的などのような“患い”の状態にあるのかということを――見とどけて、われわれに負わされた課題についての心構えを新たにしたいと思います。

今日のお話でこれまでに、日本の西洋古典学が、「富国強兵」「和魂洋才」の掛け声で始まった西洋の学問・文明の受容の中で、そして結果的にもたらされた「皮相上滑りの開化」の中で、長らく抑圧される境遇にあったこと、そして洋学受容開始からようやく1世紀後の1950年になって、「日本西洋古典学会」が名乗りをあげ、以来今日までの50年の間に、日本の西洋古典学はそれ自体としては、それなりの著しい進歩と隆盛をみるに至ったこと、を述べてまいりました。

ではしかし、学会設立後今日までのその同じ50年の間に、かつて西洋古典学を取り巻く環境であった「皮相上滑りの開化」は、皮相上滑りであることをやめて、真に内発的で望ましい開化へと改まったでしょうか。否、全く逆であると言わざるをえません。もともとそこに潜在していた病因が、いまや強い勢いを得て、現実に病を発しているように見えるのであります。

ざっと点検してみましょう。西洋の学問・文明受容の当初、日本はその基層に目を据える余裕はなく、後れをとっていた最新最先端部分の科学と技術を熱心に学び取ろうとしました。いま20世紀の終りになって、この50年間に特別に目立つようになったことといえば、何といってもその科学技術の、まさに飛躍的と称すべき発展でありましょう。

およそ50年前の1951（昭和26）年に、東京大学で開催された第２回西洋古典学会大会に出席のため、私が田中美知太郎先生のお供をして“汽車”で上京したころは、京都を朝たって東京に夜着く1日がかりの旅程という実感でした。事実それがずっと以前からの――多少の時間短縮があったにしても――ほぼ変らぬ普通の距離感覚だったのです。ところがその後の50年の間に事態は一変して、いま新幹線（“汽車”でなく“電車”になりました）でたったの２時間少々。

学会での研究発表の資料にしても、もちろん今のようにきれいなワープロ印字など思いもよらず、板書か、せいぜい手書きのガリ版のものでした。一事が万事、われわれは今日、科学技術――特に電子技術（コンピュータ）――のおかげで、交通、建築、情報、通信、医療などの諸局面において、50年前には想像できなかったような効率的で便利な環境に生き

ているといえます。

そして、明治以来わが国の国策であった科学と技術――今では実態に即して「科学技術」――を最優先する方針は、国際競争や経済成長という至上のポリシーからの要請もあって、ますます強化されています。わが国の学問のあり方を審議する「学術審議会」も、その答申に「科学技術創造立国を目ざすわが国の学術研究」云々と謳っていまして、まるで日本の学問はすべて、一途に科学技術の推進を目標としなければならないかのような言い方であります。

しかし、ここまで来た科学技術は、もはや昔日の、明治以来20世紀前半まで比較的ゆるやかに発達してきた科学技術とは、その動態において質的に異なっています。それは、「人間の生物的生存と行動の直接的な有効化」という、科学技術の本来のメリットを存分に発揮する反面、間接的あるいは最終的には、潜在していた負の副作用の顕在化によって自然を破壊し、それが体現する効率と利便という単一の価値の遮二無二の推進によって、人間性を侵しつつあります。つまり、さまざまの「倫理問題」に見られますように、人間が人間としてもっている他の精神的な諸価値とコンフリクト（価値摩擦）を起すとともに、他方、人びとは利便に馴れ、さらに次々と企業の科学技術が提供する利便を求めるというようにして、人間の欲望水準はとめどもなく上昇して行くのです。

そして、昔日と質的に異なるのは、科学技術だけではありません。日本と日本人のエートス（品性、 性格）もまた、戦後の半世紀の間に大きく変りました。日本は、かつての「富国強兵」という目標の「強兵」が挫折した後は、「富国」一辺倒となって、“エコノミック・アニマル”と呼ばれたり“経済大国”と呼ばれたりするようになりましたし、日本人は、かつての「和魂洋才」の「和魂」がどこかへ消え失せてしまい、さりとて科学技術主導の大勢は「洋魂」にも目を向けることがないのですから、残るのは「無魂洋才」ということになりました。「魂」なきところ、実益の思想は、ただの金銭至上主義と化するほかはありません。

こうして、この50年の間にいつしか日本には、ひたすら生物的欲望に聴従するところの、経済（金銭）と効率にのみ軸を置いた価値観が、したたかに根を張ってしまったように思われます。これに呼応して、教育は荒廃し、〈知〉の営みはおしなべてファッション的な、軽薄短小化の傾向にあり、戦前の旧制高校的な「教養」すらも影をひそめました。このような名状すべからざる悪性の空気の中で、本ものの〈哲学〉は今もまた、窒息寸前のような気配で気息奄々（えん）としています。

ことさらに否定的な言辞を弄しているのではありません。状況に虚心の目を開くかぎり、これが今の御時勢の大方の形勢と言わざるをえないのではないでしょうか。「日本の将来というものについてどうしても悲観したくなる」という夏目漱石の言葉を、われわれはここで再度想起させられることになります。これが「富国強兵」「実学」「和魂洋才」で始まった「皮相上滑りの開化」の、“成れの果て”なのですから。

西洋古典学は、はじめに申しましたように、それらの掛け声の指し示すところから、最

も遠い地点にみずからを定位する学問であります。ならば、今日のこの形勢を覆すことまでは不可能としても、それはわれわれの国家社会がこのまま、〈善〉の光の届かない奈落の底へと転落して行きかねないような動向に抵抗して、逆のベクトルを提供する最後の砦の一つとなるはずです。

そのために西洋古典学に要請されるあり方は、特別のことでなく、ただみずからの本来のあり方を堅持し、さらに自覚的に強調することでありましょう。本来のあり方とはやはり、先に「内憂」の一つとして申しましたような、哲・史・文がばらばらになった姿ではなく、もともとそうであったように、それらが「西洋古典学」として一体的に統合された姿こそが、それであるはずです。そもそも今日独走態勢にある理工系学問と文系学問とが分離したこと自体、人間がなぜ学問的営為を始めたかを省みるならば、反自然（παρὰ φύσιν）のことでありますが、ただそのようにいったん分離独立してしまった理工系の自然科学は、その本性上、専門分化され細分化されて行くことは不可避であるといえましょう。しかし、トータルな人間にかかわる文系学問が、ましてや文・理の分割以前の淵源にかかわる西洋古典学が、それぞれ自分の“専門”の中に「閉じこもる」「自分に目隠しをする」（マックス・ウェーバー）ということは、自殺に等しいといわなければなりません。

西洋古典学にインテグレイトされた営為としての哲学について申しますと、そのような「閉じこもり」――俺は「哲学」をやっているのであって哲学史をやっているのではない、文献学とも関係ないといった姿勢――は、かりに“哲学”であったとしても、もはやphilosophiaでは絶対にありえないと、心すべきでありましょう。

プラトンは哲学者（φιλόσοφος）たるべき者に、「もろもろの学問相互の、また実在の本性との、内的なつながり（οἰκειότης）を総合的に見て取る」ところの総合的視野と知的収斂の能力――συνοπτικός であること――を要求しました（『国家』VII. 537C）。哲学が西洋古典学の確立と相俟って上述の状態から再生するために拠って立つ基盤は、依然そこにしかないと私は信じます。それはすなわち、プラトンがそれに抗して闘った状況――金銭や権力・地位に汲々として魂を顧みない風潮、にせ哲学の横行――と同型同質の、しかし遥かに拡大増強された状況と闘うこと、そしてまた西洋古典学会設立時の初心に帰ること、にほかなりません。